令和６年度　事業報告書　目次

ご 挨 拶

鳥取大学医学部附属病院長　武中　　篤（事業責任者）……2

ご 挨 拶：事業報告書の刊行に寄せて

鳥取大学医学部附属病院　医療スタッフ研修センター在宅医療推進支援室室長　深田　美香（事業担当責任者）……3

令和６年度総括……4

令和６年度概要……4

事業概要……7

1　運営組織……7

1-1　鳥取大学医学部附属病院における事業の位置づけ……7

1-2　連絡協議会……7

1-3　実施委員会……8

1-4　在宅医療推進支援室会議（T-HOCミーティング）……9

2　運営場所……9

2-1　在宅医療推進支援室……9

3　運営内容……9

3-1　在宅医療推進のための看護師育成プログラム……9

3-2　出向プログラム……9

3-3　事業連携……9

3-4　広報活動、業績等……9

事業内容……10

1　在宅医療推進のための看護師育成プログラム……10

1-1　プログラム策定……10

T-HOCプログラム検討会　会議開催状況……10

1-2　プログラム連携……10

連携施設との連絡調整……10

1-3　受講・履修・修了の状況……11

受講生の属性……11

令和６年度各コース修了・進級状況……11

T-HOC在宅支援ナースの認定……11

1-4　プログラムの実施内容……13

Ⅰコース：在宅生活志向をもつ看護師育成コース（基礎２年間）……13

Ⅰコース：在宅生活志向をもつ看護師育成コース（実践コース）……16

Ⅱコース：在宅医療・看護体験コース……18

Ⅲコース：訪問看護能力強化コース……20

1-5　学習支援……24

訪問看護ステーションラウンド……24

各病院の学習支援体制……24

DVD学習支援……25

専門書籍の貸し出し……25

2　出向プログラム……26

2-1　訪問看護ステーションへの出向システム（T-HOC支援による）……26

2-2　訪問看護ステーションへの出向実績……27

3　事業連携……28

3-1　看看連携による事業連携……28

3-2　その他……28

看護部教育支援室連絡会議……28

4　広報活動……29

4-1　公開セミナー等の開催……29

T-HOC特別セミナー……29

第５回T-HOC POCUSセミナー……30

訪問看護ステーション出向経験者と看護管理者との交流会報告……30

4-2　公開講義……31

4-3　事業ホームページ……31

T-HOC　HPのトップページ……31

4-4　定期刊行物（ほっこりーな通信）……31

5　業績と室員自己啓発……32

5-1　研　　究……32

5-2　研修参加……33

学会への参加……33

研修会への参加……33

在宅医療推進支援室より

鳥取大学医学部附属病院　医療スタッフ研修センター

在宅医療推進支援室副室長　仁科　祐子　34

ご 挨 拶

鳥取大学医学部附属病院長
武中　　篤
（事業責任者）

鳥取大学医学部附属病院は、「地域と歩む高度医療の実践」を理念に掲げ、この理念に向かって前進し続ける使命があります。当院では患者さんに沿った治療を効果的に行うため、診療科や部門の枠組みを超えたチーム医療に取組んでおります。複数科の医師、看護師、コメディカルなど多職種が専門性を発揮し、協働して質の高い医療を目指すことで、本院の理念である高度医療の安全な実践に大きな役割を果たしております。

一方で、わが国は急速なスピードで少子高齢化が進み、団塊世代が75歳以上となる2025年以降は医療・介護の需要が益々高くなることが想定され、求められる医療のかたちも変化しています。治して病院から出る「病院完結型」医療から、在宅で生活できる医療を提供する「地域完結型」医療へ転換期をむかえる中、地域で中心的な役割を果たし、在宅医療を支える訪問看護師の人材確保が必要不可欠となることは言うまでもありません。

当院では、平成26年度末に鳥取県の「地域医療介護総合確保基金」の支援により、「在宅医療推進のための看護師育成支援事業」を立ち上げました。現在までに病院看護師への在宅生活志向の涵養や訪問看護師の確保・スキルアップなど大きな成果を得ており、修了者は高度化・多様化する在宅医療の現場で活躍しています。お陰様で今春には第10期生を送り出すことができました。

今後も地域の在宅医療を担う人材の育成と継続教育支援の拡充を目指し、附属病院、医学部保健学科をはじめ、関連各団体・施設の協力をいただきながら、本事業を遂行してまいります。

最後になりましたが、本事業の遂行にご協力いただいております、鳥取県、鳥取県看護協会をはじめ、関係各所の皆様方にこの場をお借りして厚く御礼を申し上げ、事業報告書刊行のご挨拶とさせていただきます。

令和７年３月吉日

ご挨拶：事業報告書の刊行に寄せて

鳥取大学医学部附属病院　医療スタッフ研修センター
在宅医療推進支援室　室長
深田　美香
（事業担当責任者）

令和６年度は、新たに２つの取り組みを行いました。一つは、研修プログラムの講義についてオンデマンド配信の機会を設けることにより、受講生の時間選択に自由度ができたことです。勤務との両立支援に役立っています。もう一つは、秋に行っているT-HOC特別セミナーを中部で開催したことです。全県からの参加利便性を高めることができました。今後も、研修方法の更なる工夫を行い、鳥取県全域の在宅医療推進ができる看護師育成に取り組んでまいります。

さて、鳥取大学医学部附属病院が立ち上げました「在宅医療推進のための看護師育成支援事業」では、在宅生活志向の育成と訪問看護能力の強化を目的として、平成27年度より「在宅医療推進のための看護師育成プログラム」を開講し実施しております。プログラムの理念は、「家庭や地域での生活を志向した看護」を意味するHome-Oriented Care（HOC）です。

この育成プログラムは３つのコースを擁し、それぞれ、新任看護師の在宅生活志向を育てる①在宅生活志向をもつ看護師育成コース、病院勤務の看護職が訪問看護を体験する②在宅医療・看護体験コース、訪問看護師や潜在看護師の訪問看護能力を強化する③訪問看護能力強化コースです。新人からキャリアを積んだ看護職までの幅広い層を対象にしていることで、全国的にも注目されている取り組みです。平成29年度には、①コース（基礎２年間）の修了生を対象に、在宅医療をより深く学んで頂くための①コース（実践１年間）を追加し、様々なキャリアパスに対応できるコースを準備しております。

さらに、平成30年度から、本プログラム修了者等を対象にして、病院から訪問看護ステーションへの出向システムを構築しました。今年度も病院看護師３名が訪問看護ステーションへ１年間出向し、訪問看護のOJT（On-the-Job Training）として就業しました。本事業による訪問看護師育成は、病院と訪問看護ステーションを併せた大きな職域のなかで行うことになりますので、まさに今後の在宅医療推進の方向性に沿ったものと思われます。

このプログラムは、卒後継続教育として実施していますので、すべての受講生は社会人としてそれぞれの職場に勤務されながら受講を続けられました。特に忙しいお仕事をやり繰りしながら本プログラムの講義や実習を受講され修了されましたこと、本当にお疲れ様でした。それぞれの受講生にとって、今回の受講が、今後の在宅医療と訪問看護の道を志す契機のひとつとなるようでしたら、私どもの本望でございます。

今後も、プログラム実施につきましては、附属病院と保健学科のスタッフが協力して行いますが、ぜひ、皆様方からの今まで以上のお力添えとご指導を賜ることができましたら幸甚でございます。この度、年度末にあたり、令和６年度事業報告書を刊行させていただきますので、ご高覧の上、忌憚ないご意見をお寄せいただきますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、受講生を送り出して頂きました各所属長の皆様、プログラム実施にご協力を頂きました、各訪問看護ステーションと医療介護施設、鳥取県看護協会、鳥取県他自治体をはじめ、関係各所の皆様方に、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

令和７年３月吉日

令和６年度　総括

本事業は、鳥取大学医学部附属病院医療スタッフ支援センターに設置された在宅医療推進支援室において、同支援室の専任３名の教職員に加え、医学部保健学科、医学部附属病院看護部、米子地区事務部を中心とした医学部・医学部附属病院の協業により遂行されている。

本事業が実施する「在宅医療推進のための看護師育成プログラム」は、在宅生活志向（Home-Oriented Care: HOC）の育成を基本理念に据え、新任看護師の在宅生活志向を育てる①在宅生活志向をもつ看護師育成コース、病院勤務の看護職に訪問看護を体験させる②在宅医療・看護体験コース、訪問看護師や滞在看護師の訪問看護能力を強化する③訪問看護能力強化コース、の３つのコースからなる。

本プログラム実施の10年目となった令和６年度には、３つのコースあわせて165名の受講生を迎えた。①在宅生活志向をもつ看護師育成コース（基礎２年間）では、前年度からの受講生64名に加え、本年度に76名の受講生を迎え、HOCノートを用いた個人課題等により在宅生活志向を深めた。平成29年度より新たに設置した①在宅生活志向をもつ看護師育成コース（実践１年間）では、４名が在宅医療の実践について学びをさらに深めた。②在宅医療・看護体験コースでは、病院看護師16名が訪問看護や退院後家庭訪問を体験した。③訪問看護能力強化コースでは、訪問看護師や病院看護師の５名が訪問看護ステーション実習等により訪問看護能力を強化した。

この３月には、①コース（基礎２年間）58名、①コース（実践１年間）３名、②コース15名、③コース５名、合計81名が本プログラムを修了し、①コース１年次68名が２年次へ進級した。

平成30年度から、①コース（実践１年間）の修了者等を対象にして、病院から訪問看護ステーションへの出向システムを構築した。今年度は病院看護師３名が訪問看護ステーション３箇所へ各１年間出向し、訪問看護のOJT（On-the-Job Training）として就業した。出向中の受講生の勤務状況の把握と教育効果判定のために、在宅医療推進支援室スタッフが定期的に出向先でカンファレンスを持った。出向者・同経験者の情報交換を目的として交流会を開催した。また、看護管理者を対象に、出向システムと出向による病院看護師の成長と施設間連携強化への理解のため、訪問看護ステーション出向経験者と看護管理者との交流会を開催した。

事業の広報とプログラムの深化を目的として、T-HOC特別セミナーを２回開催した。第14回は、伯耆しあわせの郷において「私にもできる訪問看護師～新卒でも病院看護師でも定年後でも～」と題して、パネルディスカッション、ワークショップを主催した。第15回は「地域の中で、地域の人と共に歩む看護」のテーマでコミュニティーナースとして活動している２人の看護師から実践や事例を紹介していただき、地域での活動を通して看護の可能性などについて意見交換をした。

管理運営については、事業の遂行状況や今後の計画について協議するため2回の連絡協議会を開催した。プログラムの遂行状況の評価や受講・修了の判定のため４回の実施委員会を開催した。プログラム・事業の具体的な実施内容の検討のため、在宅医療推進支援室会議を計10回開催した。受講生による評価や学内外者からの助言を事業内容に反映させるため、２回のプログラム検討委員会を開催し、次年度プログラムのブラッシュアップを行った。受講の利便を図るために、講義情報のメールでの周知と遠隔講義システム（Zoom等）を採用し遠隔講義を行った。

在宅医療と看護師育成についての洞察を深め、事業活動の全国への広報を図るため、担当者や委員会委員等が、日本在宅看護学会第14回学術集会、日本看護科学学会第44回学術集会、緩和ケア研究会等において情報収集を行った。

令和６年度 概要

１）背　　景

今後、在宅医療・介護連携の推進のためには、病院看護師の在宅医療の理解を深めるとともに、訪問看護師の確保の強化を図る必要があります。鳥取県では、訪問看護ステーションあたりの看護師数が少なく、若手の就業が少ないことから、今後の訪問看護を担う人材を一段と拡充することが喫緊の課題とされています。

訪問看護師不足の要因、課題としては、「経験豊富な看護師でなければ難しいと言われ敬遠されている」、「新卒看護師の中には在宅での看護に興味があっても病院に就職すると病院の機能に応じた能力が求められ在宅看護の意識が低くなる」、「病院と異なり、1人で対応できる知識・技術・判断力、コミュニケーション力が要求される」、「能力の不安、処遇面の不満があり離職している」等があげられています。

その反面、訪問看護ステーションに従事している看護職の9割弱は、「やりがいがある」と回答しており、在宅医療が高度化する中で、継続就労のためには訪問看護スキルの強化を図る必要があることがわかります。

２）事業の立ち上げと目的

平成26年度末に、鳥取大学医学部附属病院は、鳥取県の「地域医療介護総合確保基金」の支援により、「在宅医療推進のための看護師育成支援事業」を立ち上げました。この事業の目的は、「在宅医療・看護の推進を図るため、入院中から在宅生活を意識することができる新任看護師等を育成するとともに、研修終了者のうちから一定数、県内の訪問看護ステーションに出向するシステムを構築すること等で訪問看護師の確保を図ること、ならびに、訪問看護師に必要なスキルを強化することで、訪問看護師の離職防止を図る。」ことです。

平成27年４月に、鳥取大学医学部附属病院は、本事業の遂行のため、医療スタッフ研修センターに在宅医療推進支援室を新たに設置し、専任４名（のち３名）の教職員を配置しました。

３）育成プログラムの理念と別称

鳥取大学医学部附属病院は、本事業の目的を達成するため、平成27年５月に、在宅生活志向の育成を基本理念に据えた３つのコースからなる「在宅医療推進のための看護師育成プログラム」を開講しました。このプログラムの別称は、「T-HOCナース育成プログラム」です。Tは鳥取、HOC（ホック）は、Home-Oriented Careの略で、「家庭や地域を志向した看護ケア」を意味する本院の造語です。この言葉には、「病院看護師と訪問看護師が協同して在宅生活志向の看護実践を行う」という事業の理念とともに、「HOCナースが地域包括ケアシステムのなかで大きく羽ばたいて活躍して欲しい」という当院の願いを込めています。

４）育成プログラムの内容

本事業の最終的な目的は、訪問看護師の就業数を増やし、彼らに高度化・多様化する在宅医療にも対応できる訪問看護実践能力を賦与することです。そのためには、まず、①在宅医療を志向する若手看護師数を増やし、②訪問看護を体験させて訪問看護師をキャリアパスのひとつとして意識させ、さらに、③現職の訪問看護師や潜在看護師の訪問看護スキルアップを図って、やりがいの創出や離職防止に繋げることが肝要です。

在宅生活志向を育み訪問看護能力を強化することを目的としたこの育成プログラムは、新人からキャリアを積んだ看護師まで、幅広い層を対象にしていることから、独自性が高いとして全国から注目されています。このプログラムは、現在の職場に勤務しながらでも受講することができ、県の支援による事業ですので受講は無料です。このプログラムは３つのコースで構成されています。

①在宅生活志向をもつ看護師育成コース（HOCコース）

新任や就業後間もない病院勤務の看護師を対象にした、在宅生活志向を涵養するための計３年間のコースです。基礎コースの２年間は、集合研修やHOCノートを用いた個人課題からなり、続く実践コースの１年間（平成29年度より開講）では、訪問看護ステーション等での実習が加わります。

②在宅医療・看護体験コース

病院勤務の３年目以上の看護職を対象とした６ヵ月間のコースです。訪問看護ステーション実習や退院後家庭訪問を体験して、訪問看護についての関心や知識を深めることにより、訪問看護師をキャリアパスのひとつとして意識できるように支援します。

③訪問看護能力（Visiting Nursing Competency: VNC）強化コース

訪問看護師等を対象にして、訪問看護の継続教育と、高度化した在宅医療へ対応するための訪問看護能力強化を目的とした１年間のコースです。在宅医療・処置・管理等についての講義・演習、事例検討等の中から、受講者が経験や希望に応じて30コマ（60時間）を選択するオーダーメイド型の研修です。本コースは、訪問看護師としての再就職を希望する未就業看護師への復職支援プログラムの一部でもあります。

在宅医療推進のための看護師育成プログラム

	①在宅生活志向をもつ看護師育成コース	②在宅医療・看護体験コース	③訪問看護能力強化コース
目的	在宅生活志向の病院勤務看護師を増やし、訪問看護へ進む人材を増やす	在宅を見据えた看護実践の強化や地域連携の技術取得	訪問看護師に必要なスキルを強化
対象	病院看護師（新人） a）基礎コース　40名 b）実践コース　８名	病院看護職（経験３年以上）、未就業の看護経験者（准看護師を含む） 30名	訪問看護に興味がある看護職、①、②コース修了者、訪問看護経験者、未就業看護職（准看護師を含む）　８名
内容	a）基礎コース：集合研修、ディスカッション、双方向ノートによる課題提出により、在宅生活志向を高める。（期間：２年間） b）実践コース：訪問看護ステーション実習や訪問診療同行実習等による現場体験と、課題提出・振り返りを行う。（期間：１年間、基礎コース終了後に受講）	集合研修、訪問看護ステーション実習、退院後家庭訪問等を体験する。（期間：半年間）	在宅医療の技術管理等についての講義及び演習、事例検討によるグループディスカッション、課題提出等。内容は、受講者の経験や勤務等に沿って柔軟に対応する(オーダーメイド型研修)。 （期間：１年間）

5）受講・履修の状況

令和６年度の受講生は、①在宅生活志向をもつ看護師育成コース：基礎１年次76名（定員40名）、基礎２年次64名（定員40名）、①在宅生活志向をもつ看護師育成コース：実践１年間４名（定員８名）、②在宅医療・看護体験コース16名（定員30名）、③訪問看護能力強化コース５名（定員８名）でした。受講生の年齢層、勤務歴等の属性については、後述します。

各コースの授業内容と履修状況の詳細については後述します。①在宅生活志向をもつ看護師育成コース（基礎２年間）については、双方向ノートによる個人課題の提出、集合研修出席、レポート提出を、①在宅生活志向をもつ看護師育成コース（実践１年間）については、訪問看護ステーション実習、個人課題の提出、集合研修出席、レポート提出を、②在宅医療・看護体験コースについては、集合研修出席（特別セミナー含む）、訪問看護ステーション実習、退院後家庭訪問実習、レポート提出を、③訪問看護能力強化コースについては、自由に選択した30コマ以上の講義受講、訪問看護ステーション実習、レポート提出を求めました。

受講の利便を図るために、講義情報のメールでの周知と遠隔講義システムを採用しています。

6）修了・修了後の状況

①コース受講生（基礎２年次）58名は所定の履修項目を受講してコースを修了し、１年次68名は２年次へ進級しました。①コース受講生（実践１年間）３名は所定の履修項目を受講してコースを修了しました。②コース受講生15名、③コース受講生５名は、所定の履修項目を受講してコースを修了しました。修了者には鳥取大学の修了証が授与されました。

訪問看護能力強化コースの修了生については、当院の指定する授業項目を履修して修了した場合に、鳥取大学医学部附属病院長の認定によるT-HOC在宅支援ナースの称号を付与しました。本年度の③コース修了生５名は、全員がこれに該当したので同称号を付与され、その印として，各自にT-HOC在宅支援ナースバッジが贈呈されました。

7）看看連携・多職種連携によるプログラム運営

本事業の目的は、地域で働く訪問看護師を増やして、そのスキル強化を図ることです。そのためには、事業主体の大学病院だけが教育を提供する構図ではなく、大学病院と医学部保健学科が中心となり、地域における看看連携と多職種連携を促進して、地域の看護職(訪問看護ステーション看護師、地域関連病院看護師)、医療介護施設、看護協会、医師会、自治体等が協働して、地域で働く訪問看護師を育てるシステム造りが必須と考えられます（図参照）。

本事業の開始に先立って、すでに本院は、大学病院を含む８つの地域病院間の緊密な看看連携を基盤にした先進的人事交流システムを展開していて、大学病院出身の看護管理者や看護スタッフについて病院間の相互人事交流を行ってきました。そしてこの交流は人事面だけでなく、職域を超えて有機的に広がる教育研修体制の構築が可能なレベルにまで達しています。看看連携を中心としたこのような当院の機動力があったからこそ、本事業が滞りなく遂行されているものと考えられます。

8）病院から訪問看護ステーションへの出向システム

平成30年度から、①コース（実践１年間）の修了者をはじめ、本プログラム修了生等を対象にして、病院から訪問看護ステーションへの出向システムを構築しました。今年度も病院看護師３名が訪問看護ステーションへ１年間出向し、訪問看護のOJT（On-the-Job Training）として就業しました。

本事業では、大病院と訪問看護ステーション間の人事交流の推進を目標の一つに掲げています。附属病院など大病院に勤務する看護師のなかの、本プログラム修了生のように在宅医療への意識の高い人材が、一定期間、訪問看護ステーションに出向するなどの人事交流を進めることで、病院と訪問看護ステーション相互のスキルアップと意識改革に繋がることが期待されます。本事業による訪問看護師育成は、病院と訪問看護ステーションを併せた職域で始まることになりますので、在宅医療推進のための看護師育成は新しい段階を迎えたものと思われます。

9）プログラムの深化と広報活動

受講生による評価や学内外者からの助言に基づいて、次年度プログラム内容のブラッシュアップを行いました。

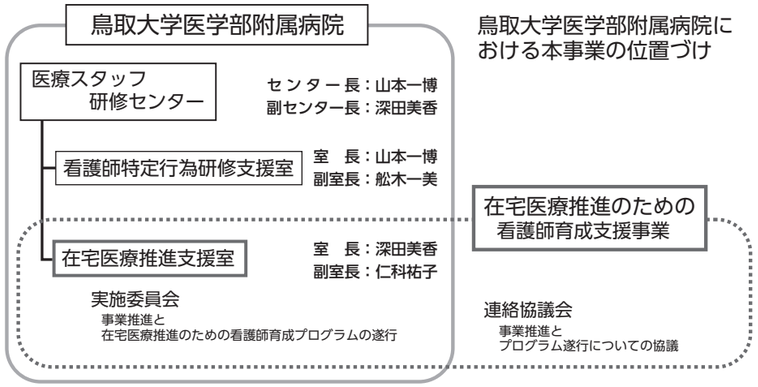
在宅医療推進のための看護師育成支援事業の概念図

事業概要

1　運営組織

1-1　鳥取大学医学部附属病院における事業の位置づけ

本事業の遂行は、鳥取大学医学部附属病院医療スタッフ研修センターの在宅医療推進支援室が担当します。
事業の遂行については学内外有識者で組織する連絡協議会による協議を参考にして実施委員会の決定に基づき実施します。



鳥取大学医学部附属病院における本事業の位置づけ

1-2　連絡協議会

■「在宅医療推進のための看護師育成支援事業」連絡協議会　会議開催状況

・第１回　令和６年８月28日～９月20日　文書送付による会議開催

【出 席 者】 深田委員・武中委員・山本委員・森田委員・鬼村委員・松本委員・藤瀬委員、藤井委員・前田委員・塚田委員・住田委員・長戸委員・岡田委員・大東委員・西山委員・小椋委員・近藤委員・大草委員・大倉委員・仁科委員・雑賀委員・吉田委員

【会議内容】
○令和６年度委員確認
○令和６年度事業実施状況報告
・コース別受講者数、看護師経験年数、勤務場所
・受講者数の年度推移
・プログラムの実施状況
・実習状況
・訪問看護ステーションへの出向状況
○「第14回T-HOC特別セミナー」開催案内
○行政、連携団体、連携施設からのご意見

・第２回　令和７年３月18日～３月25日

【出 席 者】 深田委員・武中委員・山本委員・森田委員・鬼村委員・松本委員・藤瀬委員、藤井委員・前田委員・塚田委員・住田委員・長戸委員・岡田委員・大東委員・西山委員・小椋委員・近藤委員・大草委員・大倉委員・仁科委員・雑賀委員・吉田委員

【会議内容】
○令和６年度受講生の修了・進級の報告
○令和６年度事業実施状況報告
○令和７年度の事業計画について
○在宅医療推進支援室運営要項の一部改正について
○行政、連携団体、連携施設からのご意見

■在宅医療推進のための看護師育成支援事業　連絡協議会　委員

深田　美香	鳥取大学医学部附属病院 医療スタッフ研修センター在宅医療推進支援室	室長	１号委員
武中　　篤	鳥取大学医学部附属病院	病院長	２号委員
山本　一博	鳥取大学医学部附属病院 医療スタッフ研修センター	センター長	３号委員
深田　美香	鳥取大学医学部附属病院 医療スタッフ研修センター	副センター長	４号委員
森田　理恵	鳥取大学医学部附属病院	看護部長	５号委員
鬼村　博幸	鳥取大学　米子地区事務部	部長	６号委員
松本美智子	公益社団法人　鳥取県看護協会	会長	７号委員
藤瀬　雅史	公益社団法人　鳥取県西部医師会	会長	８号委員
藤井　秀樹	鳥取県西部総合事務所　米子保健所	所長	９号委員
前田　俊和	鳥取県 福祉保健部 健康医療局 医療政策課　医療人材確保室	室長	

塚田　容子	米子市福祉保健部	部長	
住田　秀樹	日野町健康福祉課	課長	
長戸　典子	国民健康保険　智頭病院	看護部長	10号委員
岡田　義子	社会医療法人 仁厚会　藤井政雄記念病院	看護部長	
大東美佐子	医療法人・社会福祉法人　真誠会	看護部長	
西山あゆみ	鳥取県立中央病院	看護局長	11号委員
小椋美保子	鳥取県立厚生病院	看護局長	
近藤　仁子	日野病院組合　日野病院	看護局長	
大草　智子	鳥取大学医学部附属病院 医療スタッフ研修センター在宅医療推進支援室	室員	12号委員
大倉　広子	鳥取大学医学部附属病院 医療スタッフ研修センター在宅医療推進支援室	室員	
仁科　祐子	鳥取大学医学部保健学科 地域・精神看護学講座	副室長	
雑賀　倫子	鳥取大学医学部保健学科 地域・精神看護学講座	講師	
吉田　雅人	鳥取大学米子地区事務部　総務課	課長	

【陪席者】

足立　佳子	鳥取大学医学部附属病院　看護部　教育担当　副看護部長
依藤　裕子	鳥取大学医学部附属病院　看護部　教育支援室　看護師長
北村　洋子	鳥取大学米子地区事務部　総務課副課長
市川　ゆり	鳥取大学米子地区事務部　総務課法規・評価係長
合田　清志	鳥取大学医学部事務部　総務課　主任
長谷川洋子	鳥取大学医学部保健学科 基礎看護学講座
角田ひろみ	鳥取大学医学部附属病院 医療スタッフ研修センター在宅医療推進支援室　事務補佐員

1-3　実施委員会

■「在宅医療推進のための看護師育成支援事業」実施委員会　会議開催状況

・第１回　令和６年５月17日～21日（持ち回り）

【出 席 者】深田委員・仁科委員・大草委員・大倉委員・雑賀委員・森田委員・足立委員・依藤委員・吉田委員
○令和６年度受講生の認定
○令和６年度実習先受け入れ状況
○令和６年度年間スケジュール計画

・第２回　令和６年５月28日～６月３日（持ち回り）

【出 席 者】深田委員・仁科委員・大草委員・大倉委員・雑賀委員・森田委員・足立委員・依藤委員・吉田委員
○令和６年度在宅医療推進のための看護師育成プログラム受講生の認定について

・第３回　令和７年２月７日～２月12日（持ち回り）

【出 席 者】深田委員・仁科委員・大草委員・大倉委員・雑賀委員・森田委員・足立委員・依藤委員・吉田委員
○令和７年度出向予定者について
○要項の一部改正について

・第４回　令和７年３月11日

【出 席 者】深田委員・仁科委員・大草委員・大倉委員・雑賀委員・森田委員・足立委員・依藤委員・吉田委員
○令和６年度受講生の修了・進級認定について
○令和６年度在宅医療推進のための看護師育成プログラム実施状況報告

・第５回　令和７年３月12日～14日（持ち回り）

【出 席 者】深田委員・仁科委員・大草委員・大倉委員・雑賀委員・森田委員・足立委員・依藤委員・吉田委員
○令和７年度出向予定者の出向先について

■在宅医療推進支援室　実施委員会　委員

深田　美香	医療スタッフ研修センター　副センター長（６号委員兼務） 在宅医療推進支援室長	１号委員
仁科　祐子	医療スタッフ研修センター　在宅医療推進支援室　副室長	２号委員
大草　智子	医療スタッフ研修センター　在宅医療推進支援室　特命助教	３号委員
大倉　広子	医療スタッフ研修センター在宅医療推進支援室　看護師	３号委員
雑賀　倫子	医学部保健学科地域・精神看護学講座　講師	４号委員
森田　理恵	看護部長	５号委員
深田　美香	医療スタッフ研修センター　副センター長	６号委員
足立　佳子	看護部　教育担当　副看護部長	６号委員
依藤　裕子	看護部　教育支援室　看護師長	６号委員
吉田　雅人	米子地区事務部　総務課長	６号委員

【陪席者】

市川　ゆり	総務課法規・評価係　係長
合田　清志	総務課法規・評価係　主任
長谷川洋子	保健学科　基礎看護学講座
角田ひろみ	在宅医療推進支援室　事務補佐員

1-4　在宅医療推進支援室会議（T-HOCミーティング）

■在宅医療推進支援室　T-HOCミーティング開催状況

・第１回　令和６年４月22日
【会議内容】・令和６年度開講式について　・第１回実施委員会の開催について

・第２回　令和６年５月30日
【会議内容】・令和６年度T-HOC開講式・オリエンテーションのふりかえり　・基礎コースのオンデマンド視聴について

・第３回　令和６年６月13日
【会議内容】・基礎コース（１年次）第１回集合研修について　・令和６年度T-HOC実習予定について

・第４回　令和６年７月４日
【会議内容】・出向者交流会の開催について　・第１回連絡協議会開催について

・第５回　令和６年９月26日
【会議内容】・Ⅰコース（１年次）第２回・Ⅱコース第３回集合研修について　・第14回T-HOC特別セミナーについて

・第６回　令和６年10月31日
【会議内容】・訪問看護ステーション出向経験者と看護管理者との交流会について　・第１回プログラム検討会について

・第７回　令和６年11月14日
【会議内容】・Ⅰコース（１年次）第３回集合研修について　・第15回特別セミナーのテーマについて

・第８回　令和６年12月12日
【会議内容】・Ⅰコース（２年次）受け持ち患者への退院支援インタビュー後の意見交換会報告　・Ⅲコース「訪問看護に関する学会。研修会等」の承認について

・第９回　令和７年２月６日
【会議内容】・第５回T-HOC POCUSセミナーの報告　・第３・４回実施委員会開催について　・第15回特別セミナーについて

・第10回　令和７年２月27日
【会議内容】・実施コース第３回集合研修報告　・出向経験者と看護管理者との交流会報告　・令和６年度修了式スケジュールについて

2　運営場所

2-1　在宅医療推進支援室

平成27年４月に、鳥取大学医学部附属病院は、本事業の遂行のため、新たに医療スタッフ研修センター在宅医療推進支援室（74㎡）を整備しました。

3　運営内容

3-1　在宅医療推進のための看護師育成プログラム

3-2　出向プログラム

3-3　事業連携

3-4　広報活動、業績等

事業内容

1　在宅医療推進のための看護師育成プログラム

1-1　プログラム策定

T-HOCプログラム検討会　会議開催状況

■在宅医療推進のための看護師育成支援事業のプログラム検討会

・第１回　令和６年11月14日（木）

【出 席 者】深田室長、仁科副室長、雑賀講師、足立副看護部長、依藤看護師長、大草室員、大倉室員

【陪 席 者】合田主任、長谷川職員、角田事務補佐員

【会議内容】・令和７年度　シラバス・実習先・年間スケジュールの検討
・令和７年度予算案について

・第２回　令和７年２月27日（木）

【出 席 者】深田室長、仁科副室長、足立副看護部長、依藤看護師長、大草室員、大倉室員

【陪 席 者】市川係長、合田主任、長谷川職員、角田事務補佐員

【会議内容】・令和７年度　シラバス・年間スケジュール・実習要項・募集要項について

■在宅医療推進支援室　プログラム検討会　委員

氏　　名	役　　職
深田　美香	医療スタッフ研修センター　副センター長・在宅医療推進支援室　室長
大草　智子	医療スタッフ研修センター　在宅医療推進支援室　室員
大倉　広子	医療スタッフ研修センター　在宅医療推進支援室　室員
仁科　祐子	医療スタッフ研修センター　在宅医療推進支援室　副室長
雑賀　倫子	保健学科地域・精神看護学講座　講師
森田　理恵	看護部長
足立　佳子	副看護部長
依藤　裕子	看護部　教育支援室　看護師長
【陪席者】	
市川　ゆり	総務課法規・評価係長
合田　清志	総務課法規・評価係主任
長谷川洋子	保健学科　基礎看護学講座
角田ひろみ	在宅医療推進支援室　事務補佐員

1-2　プログラム連携

連携施設との連絡調整

在宅医療推進支援室では保健学科教員、附属病院看護部、医学部内の教職員、地域の看護職、医師会、看護協会、他大学、自治体等からの講師派遣や助言、訪問看護ステーション、訪問診療同行などの実習受け入れによりプログラムを運営している。

1-3　受講・履修・修了の状況

受講生の属性（165名）

【所　属　先】（名）

Ⅰコース（基礎コース　１年次）		
東部	鳥取県立中央病院	3
東部	尾﨑病院	2
東部	岩美病院	3
中部	鳥取県立厚生病院	6
西部	鳥取大学医学部附属病院	52
西部	米子医療センター	1
西部	博愛病院	6
西部	日野病院	2
西部	日南病院	1
合　計		76

【所　属　先】（名）

Ⅰコース（２年次）		
東部	鳥取県立中央病院	4
東部	尾﨑病院	4
東部	岩美病院	2
中部	鳥取県立厚生病院	3
西部	鳥取大学医学部附属病院	27
西部	米子医療センター	3
西部	博愛病院	13
西部	日野病院	2
西部	日南病院	6
合　計		64

【所　属　先】（名）

Ⅰコース（実践コース）		
西部	鳥取大学医学部附属病院	3
西部	米子医療センター	1
合　計		4

【所　属　先】（名）

Ⅱコース		
中部	鳥取県立厚生病院	3
西部	鳥取大学医学部附属病院	10
西部	済生会境港病院	2
西部	労災病院	1
合　計		16

【所　属　先】（名）

Ⅲコース		
西部	鳥取大学医学部附属病院	1
西部	訪問看護ステーションネットケア	3
西部	弓浜ゆうとぴあ	1
合　計		5

【令和６年度　受講生看護師経験年数】（名）

看護師経験年数	Ⅰコース（1年次）	Ⅰコース（2年次）	実践コース	Ⅱコース	Ⅲコース	合計
2年目	64					64
3年目	8	57				65
4年目	4	6	3	1		14
5年目		1				1
6～9年目			1		1	2
10～14年目				4		4
15～19年目						0
20～24年目				5	2	7
25～29年目				4	1	5
30年目以上				2	1	3
合計	76	64	4	16	5	165

【令和６年度　受講生勤務場所】（名）

	Ⅰコース（1年次）	Ⅰコース（2年次）	実践コース	Ⅱコース	Ⅲコース	合計
一 般 病 棟	56	51	4	8		119
急性期病棟	16	9		3		28
回復期リハビリ病棟		1				1
地域包括ケア病棟				1		1
療 養 病 棟	4	3				7
外　　来				2		2
医療福祉支援センター					1	1
感染制御部				1		1
看　護　部				1		1
訪問看護ステーション					4	4
合　　計	76	64	4	16	5	165

令和６年度　各コース修了・進級状況　人数

Ⅰコース	基礎１年次	基礎コース２年次に進級	68
	基礎２年次	修了	58
	実践コース	修了	3
Ⅱコース		修了	15
Ⅲコース		修了	5

T-HOC在宅支援ナースの認定

■在宅医療推進のための看護師育成プログラム

「T-HOC（Tottori-Home Oriented Care）在宅支援ナース」の認定について

１．趣旨

鳥取大学医学部附属病院在宅医療推進のための看護師育成支援事業「在宅医療推進のための看護師育成プログラム」Ⅲ．訪問看護能力強化コースの修了生に対し鳥取大学医学部附属病院より地域の訪問看護の質向上を果たす役割の看護師として認定する。

2．期待する効果

地域の訪問看護の質向上

・地域のリーダーシップ役割

・訪問看護師の育成役割

Ⅲコースが定める必須講義を含めた30講義以上の受講、セミナー受講、所定の実習を修了することにより、必要な知識の習得、不足した能力の補強を行い、地域の訪問看護のリーダー役割、かつ後輩の人材育成を担うに相応しい看護師である。

3．名称

「T-HOC（Tottori-Home Oriented Care）在宅支援ナース」

4．認定の基準

以下の①②を満たす者を認定とする

① Ⅲ.訪問看護能力強化コースを修了した者

② Ⅲ.訪問看護能力強化コースの講義「Ⅰ在宅医療の社会システム」「Ⅱ在宅医療に必要な病態学」「Ⅲ訪問看護に必要な技能」の各分野から１講義以上を受講した者

5．T-HOC在宅支援ナース認定者

平成29年度　７名

所　属	氏　名
国立病院機構　鳥取医療センター	谷口　悦子
博愛病院	金尾　正美
鳥取大学医学部附属病院	大塚　　希
NPO法人ライセンスワーク　私の看護師さん	水田　宏子
デイサービスエレファント	古都　有希
錦海リハビリテーション病院	大坂　保子
訪問看護ステーションふる里	前田　静香

平成30年度　９名

所　属	氏　名
	廣岩　由美子
訪問看護ステーションなんぶ幸朋苑	豊田　郁恵
すまいる訪問看護リハビリステーション	継山　ゆかり
訪問看護ステーション　えん	山元　佐知子
訪問看護ステーション　ゆりはま	湖山　英恵
訪問看護ステーション　ラビット	村上　喜恵
鳥取大学医学部附属病院	伯田　直江
鳥取県看護協会 訪問看護ステーション	大場　明奈
こころね訪問看護ステーション観音寺新町	中村　加奈

令和元年度　７名

所　属	氏　名
医療法人　なかむら医院	横田　美子
医療法人真誠会　訪問看護ステーションネットケア	佐藤　真里
訪問看護ステーション　ゆりはま	山脇　美里
すまいる訪問看護リハビリステーション	大家谷　裕美子
鳥取大学医学部附属病院	塩　　明日花
鳥取大学医学部附属病院	白根　あゆみ
独立行政法人　国立病院機構　米子医療センター	景井　美沙

令和２年度　４名

所　属	氏　名
安来市地域包括支援センター	池上　智子
安来市医師会訪問看護ステーション	佐波　由佳
すまいる訪問看護リハビリステーション	新宮　かおり
日南町国民健康保険　日南病院	西田　　翔

令和３年度　７名

所　属	氏　名
鳥取県立厚生病院	牧野　由香
鳥取大学医学部附属病院	浅野目　佳余
医療法人十字会　訪問看護ステーションのじま	酒本　さおり
すまいる訪問看護リハビリステーション	米村　　唯
訪問看護リハビリステーション　ラビット	加納　久美
米子市社会福祉協議会　よどえ通所介護事業所	村上　幸奈
鳥取大学医学部附属病院	小豆澤　愛由美

令和４年度　８名

所　属	氏　名
ホームベースドケア訪問看護ステーション	中島　容子
江尾診療所	遠藤　　綾
鳥取大学医学部附属病院	足立　佳子
訪問看護ステーション　ふる里	足立　真由美
鳥取県看護協会訪問看護ステーション	山内　華音
訪問看護ステーションゆりはま	潮　　裕美
訪問看護ステーションネットケア	角田　直子
鳥取大学医学部附属病院	赤堀　夏奈子

令和５年度　６名

所　属	氏　名
訪問看護ステーションネットケア	竹内　乃亮
訪問看護ステーションネットケア	山口　千里
訪問看護ステーションネットケア	大門　あみ
江尾診療所	富田　愛佳
鳥取県立厚生病院	太田　憲子
中部療育園	新田　美保

令和６年度　５名

所　属	氏　名
訪問看護ステーションネットケア	菅原　静香
訪問看護ステーションネットケア	河瀬　仁美
訪問看護ステーションネットケア	坂井　彩華
弓浜ゆうとぴあ	窪田　亜由子
鳥取大学医学部附属病院	永田　あゆみ

1-4　プログラムの実施内容

Ⅰコース：在宅生活志向をもつ看護師育成コース（基礎２年間）

基礎コース　１年次

研修項目 1／8　個人課題①

【ね ら い】受講生自身が受講動機を意識する

【HOCノート課題】・このコースを受けてどんな看護師になりたいか？未来の私とは？

【受講生記入内容】（一部抜粋）

・T-HOCの研修を通して、患者の身体、心理、社会面での課題を明確にし、地域担当者と協働しながら患者により良い形で地域に帰れるような支援ができる看護師になりたいと考える。

・自部署では短期間で転棟や転院される患者さんが多く、限られた期間の中で実施することが多いと感じるが、退院後の生活を見据えながら、早期から支援を行う必要性を認識し、行動できる看護師になりたい。

研修項目 2／8　第１回集合研修A・B

【ね ら い】新人看護師が在宅志向の必要性を知る事ができる

【日　　程】A）令和６年７月３日（水）13：00～15：00　　B）令和６年７月５日（金）13：00～15：00

【場　　所】A）鳥取大学医学部　記念講堂　　B）鳥取大学医学部附属病院第２中央診療棟会議室３・４

【参 加 者】A）38名（欠席２名）　看護学生４名　　B）35名

【研修内容】１．講義「患者を生活の場に戻すために必要な視点」（オンデマンド）

講師：鳥取大学医学部附属病院医療福祉支援センター　　木村公恵

２．グループ討議「事例より看護連絡票の活用方法について考える」

〈講義内容〉

高齢化社会の現状、行政の取り組み、経済への影響などについて説明。退院後の生活を支援するために患者・家族・医療者の情報共有が重要であり情報伝達のために観察力、言語力を高め、受け手の立場に立って看護連絡票を書くことが重要であることを講義。

〈グループ討議〉

各受講生が持参した看護連絡票を元に基本項目が記入されているか、不足している情報はないか、この患者さんの支援をしない場合の問題点、問題に対する支援は何が必要か、などについて討議し発表した。

【アンケート回答】（一部抜粋）

・講義は日々実際に経験している退院支援、退院調整であるのでさらに理解が深まる内容であった。

・みんなで意見を出し合うことで自分にない考えを知ることができた。

・各グループそれぞれ異なる看護連絡票での検討のため、他のグループの発表については内容が汲み取れず聞くだけとなってしまった。

研修項目 3／8　個人課題②

【ね ら い】受講生自身が「今年度の私の目標」を明確にする

【HOCノート課題】・今年度の私の目標

・目標を達成するための具体的な行動目標

【受講生記入内容】（一部抜粋）

（今年度の私の目標）

・患者の背景を捉え、地域担当者と密に連携をとりながら、患者にとって最適なサービスが受けられるよう調整する。

・患者さんがスムーズに転院、退院できるために、担当看護師としての役割を理解することができる。

・担当看護師として患者さんの入院前の様子を把握して、退院支援に繋げる事ができる。

研修項目 4／8　個人課題③

【ね ら い】所属施設の退院システムについて知る

【HOCノート課題】

・自分の病院にある退院支援に関わる部署

・退院支援内容（退院支援に関わる部署の支援内容）

・あなたの部署と退院支援に関わる部署の連携について、図示もしくは例を用いて説明する

【受講生記入内容】

・自分たちの所属施設の退院支援システムについて各自で学びまとめた。

研修項目 5／8　第２回集合研修A・B

【ね ら い】訪問看護ステーションへ出向した看護師から、在宅生活志向への広がりを持った退院支援について学ぶ

【日　　程】A）令和６年10月16日（水）13：00～15：00　　B）令和６年10月23日（水）13：00～15：00

【場　　所】A）鳥取大学医学部　記念講堂　　B）鳥取大学医学部附属病院第２中央診療棟会議室３・４

【参 加 者】A）37名（欠席２名）　B）35名（欠席１名）
【研修内容】１．講義「訪問看護ステーションの出向から見えた病院看護師の退院支援」（オンデマンド）
講師：訪問看護ステーションネットケア　池田章幸
２．グループ討議「事例を通して退院支援に向けて自分はどう動けばいいか考えよう」

〈講義内容〉
1年間の出向を経て訪問看護ステーションに入職した経験から、出向先の特徴や困った時にはいつでも相談できる安心感がある環境である事、本人・家族の覚悟と在宅サービスがあれば自宅に帰れること、様々な職種が関わる事で利用者・家族の生活を支えており、訪問看護師はその一部であることなど事例を通して説明された。

〈グループ討議〉
事例から、入院中の支援、退院後予想されることや必要な支援についてそれぞれのグループで検討。

【アンケート回答】（一部抜粋）
・具体的な事例もあり連携や介入内容が分かりやすかった。
・グループワークや他のグループの発表を聞いて自分と違う視点に気づかされた。
・実際の現場を教えてもらい、よりリアルに感じる事が出来た。

研修項目 6／8　個人課題④

【ね ら い】実際に行った退院支援について振り返りを行う
【HOCノート課題】
・受け持ち患者に実践した退院支援を１事例取りあげる
・退院に向けての課題と実際に行った退院支援の内容をまとめた

研修項目 7／8　第３回集合研修A・B

【ね ら い】実際に訪問看護師として活動している若手訪問看護師、新卒訪問看護師の報告や意見交換により退院支援に必要な視点を理解できる
【日　　程】A）令和７年１月16日（木）13：00～15：00　B）令和７年１月23日（木）13：00～15：00
【場　　所】鳥取大学医学部附属病院会議室２・３
【参 加 者】A）38名（欠席３名）　B）33名（欠席３名）
【研修内容】１．講義（オンデマンド）
「新卒から訪問看護師へ」　講師：訪問看護ステーション友喜　松本彩花
「訪問看護の実際～ Well beingを支える看護～」講師：訪問看護ステーションコミケ　安達弓恵
２．グループ討議「事例から社会資源を考える」

〈講義内容〉
松本氏から訪問看護ステーションに大学卒で就職をして、これまでに得た訪問看護の看護観について事例を通しながら講義。安達氏は、雲南市で2015年に訪問看護ステーションを立ち上げて、地域在宅医療と若手医療者育成に携わってこられた。訪問看護では「その人らしさ」や「Well being」を支えながら看護をしていく視点について事例を通しながら講義。

〈グループ討議〉
6グループに分かれ、「事例から社会資源を考える」のテーマで①思いつく社会資源をあげる、②入院中にこんな看護をしました、の内容で日々の病棟での看護やこれまでの研修内容を振り返りながら意見を出し合った。

【アンケート回答】（一部抜粋）
・今まで訪問看護についてあまり知識がなかったが、患者個々の生きがいを尊重した看護を実践されており興味を持てた。
・新たな視点を学ぶことができ、今後の看護について考えられた。
・訪問看護でも働いてみたいと思った。

研修項目 8／8　個人課題⑤

【ね ら い】２年次に向けての課題を明確にする
【HOCノート課題】
・２年目に向けての目標
・達成するための具体的な行動目標

【受講生記入内容】（一部抜粋）
〈２年目に向けての目標〉
・退院支援をしていく上で退院後どう過ごしていきたいかを聞き取り、意向にあった支援をしていく。
・自宅での生活で具体的にどんなサポートが必要か考えることができる。
・退院後も安心して生活できるように支援を整える。
〈達成するための具体的な行動目標〉
・患者・家族と話す機会を作り、退院後の意向を聞く。
・日々の看護の中で、入院前の家庭での様子を聞き、どんな状態で帰りたいかを本人・家族と共有する。
・カンファレンスの実施、医療福祉支援センターの介入、ケアマネージャーとの連絡。

基礎コース　２年次

研修項目1／5　第４回集合研修A・B

【ね ら い】在宅生活志向に必要な知識の確認ができる
【日　　程】A）令和６年６月20日（木）13：00～15：00　B）令和６年６月27日（木）13：00～15：00
【場　　所】鳥取大学医学部　記念講堂
【参 加 者】A）32名（欠席１名）　B）30名（欠席１名）
【研修内容】１．講義「退院後を見据えた看護活動と在宅療養で必要な資源～介護保険・医療保険の仕組み～」（オンデマンド）
講師：真誠会医療福祉連携センター　センター長　小山雅美
２．グループ討議「事例を基にどのようなサービス・指導が必要かを考える」

〈講義内容〉
介護保険を取り巻く現状、介護保険制度と医療保険、入退院調整、サービスなどについて講義。受講生にとっては制度やサービスなど実際の業務と結びつくため興味ある内容だった。

〈グループ討議〉
事例を基に、入院中、退院後の生活を見据えた看護活動、退院後、在宅療養で必要な支援について話し合う。

【アンケート回答】（一部抜粋）
・わかりやすい講義で介護保険への理解が深まった。
・退院後に使用できるサービスの具体的内容を知る事が出来た。
・その人の生きがいを失わないため様々な方面からアプローチが必要だと改めて理解した。
・患者さんに接する時、想像力をもって関わる事ができると思う。

研修項目2／5　個人課題⑥⑦：受け持ち患者への退院支援インタビュー

【ね ら い】退院支援を行った受け持ち患者より、実際に退院してからの生活・受講生の退院支援の内容を再確認することができる
【HOCノート課題】
・実際に行った退院支援と工夫した点
・退院してからの生活の様子
・話を聴いて、自分の行った退院支援を振りかえる

研修項目3／5　第５回集合研修A・B

【ね ら い】在宅生活志向による病院看護師と訪問看護師の連携を理解する
【日　　程】A）令和６年９月19日（木）13：00～15：00　B）令和６年９月20日（金）13：00～15：00
【場　　所】鳥取大学医学部附属病院第２中央診療棟会議室３・４
【参 加 者】A）31名（欠席１名）　B）30名（欠席２名）
【研修内容】１．講義「退院後の生活を見据えた病院看護師と訪問看護師の連携～新生児・小児編～」
講師：鳥取大学医学部附属病院　新生児集中ケア認定看護師　安達香奈
２．グループ討議「在宅療養を支援する担当看護師としての役割～多職種との連携を図って～」
ファシリテーター：鳥取大学医学部附属病院医療福祉支援センター　渡邉裕美

〈講義内容〉
院内の新生児ケアユニットを分かりやすく映像で紹介。退院後も在宅で医療的ケアができる体制が整ってきていることや小児在宅移行パスを活用し入院中から在宅への支援に関わる看護師の連携ができるようになったことを話された。アンケートでも９割以上が理解できた、ほぼ理解できたとの回答で分かりやすい内容であった。

〈グループ討議〉
講師から支援期間の異なる３事例についてそれぞれ、家族の思いや、必要な情報、具体的な支援内容と多職種連携について検討し発表。

【アンケート回答】（一部抜粋）
・どの時期にどのような支援が必要かなど具体的に説明され理解しやすかった。
・ICUから一般病棟へ移行は同様だが、患者だけでなく家族との関わりが重要であり、先を見据えての準備がより重要に感じた。
・内容は難しかったが、資料を参考にしながら話し合いができた。

研修項目4／5　受け持ち患者への退院支援インタビュー後の意見交換会A・B

【ね ら い】受け持ち患者への退院支援インタビューを実施後、他の受講生と情報交換し、実施できている点と課題となることを明確にすることができる
【日　　時】A）令和６年11月19日（火）13：30～15：00　B）令和６年11月22日（金）13：30～15：00
【場　　所】鳥取大学医学部附属病院第２中央診療棟会議室３・４
【参 加 者】A）31名　B）31名（欠席１名）
【アドバイザー】県立中央病院　患者支援センター副センター長　田中幸世（B）
尾﨑病院　地域連携室室長　林　幸希（B）
岩美病院副看護部長・地域連携室長　前田真奈美（A）
県立厚生病院　地域連携センター長　竹本智美（A）
米子医療センター　地域医療連携係長　吉野眞由美（B）

博愛病院主任看護師・入退院支援看護師　川内由里（A）　副主任看護師　　藤景　彩（B）
日野病院副看護局長　　小原佐智子
日南病院T-HOC担当責任者　　北垣麻規子（A）
鳥取大学医学部附属病院　医療福祉支援センター師長　　木村公恵（A・B）

【研修内容】グループ内で発表・意見交換
1．「退院支援をした患者さんから聞き取った内容より、自分の行った退院支援を振り返る」
2．「今後の退院支援を行う上での自分自身の課題・退院支援のポイントについて話し合う」

【ま と め】各受講生の退院支援を共有し合い意見交換することで、自らの看護を振り返り、さらに深めて考えることができた。また所属先の看護管理者と交流する良い機会となった。

【アンケート回答】（一部抜粋）
・普段関わらない部署の退院支援について意見交換を通して知る事が出来、自分自身の支援も振り返る事が出来た。
・自分の意見を言い、グループメンバーから感想やアドバイスをもらったので今後に活かしたい。
・本人、家族の意向を確認しながら、統一した方向に向かって、多職種と連携していくことが重要である。

研修項目5／5　個人課題⑧：在宅生活志向に対する考え方の変化、実践していること、今後の課題

【ね ら い】２年間の学びと今後の課題を明確にする

【HOCノート課題】
・２年間のこのコースを受けた感想、考え方の変化
・実践していること
・今後の課題

【受講生記入欄】（一部抜粋）
〈２年間このコースを受けた感想〉
・入院時から退院の事を考え、多職種で情報共有していくことが大切で、病院内だけではなく院外の方とも連携していくことが大切だと分かった。
・本人だけでなく家族にも聞き、多職種と情報共有すること、必要時には妥協点を見つけることも大切なことだと思う。
〈実践していること〉
・退院に向け家族構成や、連携室の情報をみるようにし、利用中のサービスやケアマネからの情報を確認するようになった。
・信頼関係を構築するために、プライマリー患者を日勤で受け持った時や家族の面会時には積極的に訪室しコミュニケーションをとるようにしている。
〈今後の課題〉
・入院時から退院に向けた目標を立て介入していきたい。面会時に患者の状態は話しても、家族の気持ちや退院後の希望がなかなか聞けていないので聞くようにしていきたい。
・T-HOCでの学びを活かし、ひとつひとつ事例を振り返りながら次の支援に繋げていきたい。

Ⅰコース：在宅生活志向をもつ看護師育成コース（実践コース）

【HOCプラスノート】今年度の目標
【受講生記入内容】（一部抜粋）
〈このコースへの思い～なぜ、参加しようと思ったのか？〉
・日々の看護、退院支援を行う中で、自宅で過ごされている患者さんの実際を知り、さらに今後の看護に繋げていきたいと思った。
・２年間の受講中、訪問看護師の方々からの話を聞いて、自分も訪問看護に同行する機会が出来たらいいなと思っていた。
・退院された患者さんが自宅でどのような生活を営み、家族がどのような介護や医療ケアを行っているのか実際に知り、そこで得た学びを活かして、スムーズな地域連携、退院支援を行えるようになりたい。
〈今年度の目標〉
・訪問看護の実際について学び、訪問看護と医療機関の連携について学び、自部署の退院支援で活かせるようにする。
・患者の自宅での生活を意識し患者家族の意向に沿った退院支援が実践できる。
〈達成するための具体的な行動目標〉
・患者さんだけでなく家族の思い、様子を知る事ができるように行動する。
・訪問看護に同行、看護師と患者、多職種との関わりについて見学。
・多職種カンファレンスを行い多職種で連携した退院支援を実践する。

研修項目1／8　第１回集合研修

【ね ら い】訪問看護師の役割を知る事で、生活を中心とした看護の視点を明確にする
【日　　程】令和６年６月26日（水）10：50～12：20
【場　　所】鳥取大学医学部アレスコ棟211講義室
【参 加 者】４名
【研修内容】講義「訪問看護師の役割・機能・特性」
講師：鳥取県訪問看護支援センター所長・在宅ケア特定認定看護師　　鈴木　妙

〈講義内容〉
訪問看護を取り巻く社会的背景や訪問看護の定義、県内の訪問看護ステーションの現状とニーズ、求められる役割や看護の視点、活動の特性などにについて講義。

【HOCプラスノート】（一部抜粋）
〈講義で印象に残ったこと〉
・自宅で過ごすという事は、病院のように全て整った環境ではないと分かっていたつもりだったが、患者さんのADLだけでなく実際の生活の場を知って行う、退院支援の大切さを学びました。
・訪問看護は利用者・家族が主体性をもってセルフケア能力を高められる関わりが大切であると学んだ。
〈あなたの考え～講義を通して～〉
・患者さんからよく病院にいると安心だから家に帰らなくてもいいと聞くことがあり、何かあった時すぐに看護師が来てくれるからだろうと思っていたが、それだけではないのかもと感じた。実習で在宅の生活を知り、今後の退院支援に繋げていきたいと思った。
・住み慣れた地域へ帰るためには本人の選択と家族の心構えが必要であり、意思の把握が大切であると改めて考えることができた。また、患者自身の力を発揮できるよう支援していく為にアセスメントし、どうしたらできるのか一緒に考えたりすることのできる看護師になりたい。

研修項目2／8　第２回集合研修（第14回特別セミナー）

【ね ら い】T-HOC受講生と総合診療医、医学生及び看護学生、地域の行政職が対話し、地域における医療従事者の専門性や医療・看護の現状、課題を理解し、相互に連携できる関係づくりを目指す
【日　　程】令和６年９月28日（土）10：00～15：00
【場　　所】倉吉市　伯耆しあわせの郷
【参 加 者】４名
【HOCプラスノート】
〈印象に残ったこと〉
・利用者本人と家族の思いと現状とのずれや、利用者と家族の意向の違いなどを最小限にし、利用者、家族、医療者が同じ方向に向かっていけるよう支援することの大変さや大切さを学んだ。その人らしさという事では看護師の勝手な思い込みで患者さんを決めつけていたのではないかと反省した。
・新卒での訪問看護師の方の経験談は技術を学ぶ機会がなく大変だったことなど、普段聞けない話で印象的だった。また、グループワークでサービス調整に時間がかかり、退院のタイミングを逃してしまった失敗談など、日々看護師として、行政として何が良いか迷う事の多い話は共感することも多かった。

研修項目3／8　退院支援実習

【ね ら い】退院前カンファレンスの参加、自宅訪問等を通じて患者の生活を理解し、より具体的な退院支援の視点をもつ
【実施期間】令和６年７月～12月
【実施内容】
・退院支援が必要な患者の中で、退院前カンファレンスの実施や退院前後に自宅訪問できる対象者を選択し、退院支援を行い、自分が行った退院支援を振り返る。

【HOCプラスノート課題】
・①あなたが患者さんに対して行った退院支援
・②退院後訪問で退院後の生活の様子を聞く
・①②を踏まえ、より具体的な退院支援について考える

【HOCプラスノート】
・カンファレンスの概要や多職種の視点、行った退院支援の内容と自宅訪問をしての気づきなどをまとめた。

研修項目4／8　訪問看護ステーション実習（５日間）

【ね ら い】・家族を含めた利用者に対し専門的知識と個別性をふまえた支援の展開を知る
・訪問看護師として多職種と協働する必要性や役割を理解できる
【実施期間】令和６年７月～10月
【実施内容】
・一人５日間、訪問看護ステーションで実習を行った。
・実習最終日には、実習生と実習先の管理者またはスタッフ、および支援室室員とカンファレンスを行い、実習の振り返りを行った。
・実習レポートを作成

研修項目5／8　地域包括支援センター実習

【ね ら い】・地域包括ケアシステムの中で地域包括支援センターが実際行っている地域住民への働きかけを知る
・家族を含めた利用者に対し、専門的知識と個別性をふまえた支援の展開を知る
【実施期間】令和６年７月～９月（１日間）

【実施内容】
・地域包括支援センターで1日実習を行い、モニタリング訪問の同行、担当者会議の同席、地域の予防活動への参加などを行った。

研修項目6／8　訪問診療同行実習

【ね ら い】在宅療養者の生活を支援する１つである訪問診療の実際を知る
【実施期間】令和６年８月～11月（１日間）
【実施内容】
・訪問診療に１日同行し実際に提供されている訪問診療の実際を学んだ。

研修項目7／8　実習後の意見交換会（Ⅲコース合同）

【ね ら い】所属先や経験が異なる受講生が、お互いの学びを共有することで理解を深め、今後の看護実践に活かすことができる
【日　　程】令和６年12月５日（木）13：30～15：30
【場　　所】鳥取大学医学部アレスコ棟261講義室
【参 加 者】実践コース　３名
【研修内容】１．講演「訪問看護師として大切にしていること」
　　アドバイザー：すまいる訪問看護リハビリステーション　　坪倉真由
　　２．実習報告「実習を通しての学びと感想」
　　３．グループ討議「実習での学びから自己の課題を明確にする」
【HOCプラスノート】
〈あなたの考え～講義とグループワークを通して～〉（一部抜粋）
・患者さんを「地域で暮らす生活者」として捉え、疾患と共存しながら生活を営む様子を想定し、患者さんの「できる力」を奪わないように意識して日々の看護を行っていきたい。
・病棟の患者さんよりもADLが悪い利用者さんでも、在宅ではゆっくりと自分のペースで、時には家族の手を借りながら、出来ることは自分でされている様子や、「転ばないように気をつけてます」と話される利用者さんの笑顔が心に残りました。実習で出会った患者さんのように笑顔で過ごせる時間が作れるよう退院支援を行っていきたい。

研修項目8／8　第３回集合研修（Ⅲコース合同）

【ね ら い】これまでの学びを今後の看護活動にどのように反映するか明確にする
【日　　程】令和７年２月14日（金）13：30～16：00
【場　　所】鳥取大学医学部アレスコ棟６階　261講義室
【参 加 者】３名（１名欠席）
【研修内容】講義「在宅生活志向の実践に向けて」
　　講師：ウィル訪問看護ステーション江戸川所長　　岩本大希
　　グループワーク「T-HOCでの学びを今後の在宅生活志向の看護にどのように活かすか」
〈講義内容〉
　訪問看護ステーションの活動内容、在宅生活志向の看護の九つのキーワードについて具体的な事例を示し分かりやすく講義された。
〈グループワーク〉
　T-HOCを受講してどう変化したか、どんなことが今の職場へ持ち帰れるかなど一人一人の学びや気づきを話し合った。
【アンケート回答】（一部抜粋）
・日々の看護で感じる思いの後押しとなる講義でした。
・患者さんと直接話をして何がしたいのか、何を大切にされているのかを理解するようにしたい。

Ⅱコース：在宅医療・看護体験コース

研修項目1／7　第１回集合研修

【ね ら い】・訪問看護師の役割や実際の業務について学ぶ
・介護保険サービス利用に至る過程や、在宅医療体制の中での訪問看護の役割を学ぶ
【日　　程】令和６年６月26日（水）10：50～15：00
【場　　所】鳥取大学医学部アレスコ棟211講義室
【参 加 者】16名
【研修内容】１．講義「訪問看護師の役割・機能・特性」10：50～12：20（実践コース・Ⅱコース合同）
　　講師：鳥取県訪問看護支援センター所長・在宅ケア特定認定看護師　　鈴木　妙
　　２．講義「医療保険・介護保険の仕組み」13：30～15：00
　　講師：北栄町福祉課地域包括支援センター長　　池田伸夫
〈講義内容〉
１．（実践コース　P16参照）
２．県内の高齢化の現状と今後の推移、介護保険制度の仕組み、ケアプランのプロセスやサービスの種類、地域包括支援センターの役割や事業内容など、北栄町の取り組みを動画で紹介しながら具体的に講義。
【アンケート回答】（一部抜粋）
・地域での活動を知る事が出来、興味深かった。
・自分でも介護保険や地域の活動について学んでみようと思った。
・地域で過ごしやすく生活をするために、どのような工夫をされているのかがよく分かった。
・環境整備サービスやフレイル予防など地域の皆さんにお知らせしたい内容だった。
・介護保険や様々な福祉サービスについて学べ、職場で活かせると思う。

研修項目2／7　第２回集合研修

【ね ら い】多職種連携の中で見える地域での看護師の役割を学ぶ
【日　　程】令和６年８月１日（木）13：30～15：30
【場　　所】鳥取大学医学部アレスコ棟261講義室
【参 加 者】16名
【研修内容】１．講義「安心して在宅で暮らすために～在宅看護の力～」
　　講師：前ホームベースドケア訪問看護ステーション管理者　　瀬尾勇仁
　　２．グループ討議「地域を見据えた退院支援を進めるために今実践すること」
〈講義内容〉
・様々な事例を通して在宅療養を見据え看護の継続性をふまえた実践能力とケアシステムの担い手として看護師にどのような機能を期待されているかについて講義。
〈グループ討議〉
　３グループに分かれて、「多職種間でそれぞれを繋ぐ役割が看護師に求められていることを意識しなければいけない」「地域連携パスが有効に活用されていない」「病院での指導は個別性にかけ、患者・家族に合わせた指導が必要である」等活発な話し合いがされた。
【アンケート回答】（一部抜粋）
・事例の動画や写真があり、利用者の様子や家族の思いがよく理解できた。
・他病院、他施設の受講生の意見が聞けて新鮮で学びになった。
・患者さんを生活者として支援していく視点について学んだ
・出来ないからサービスを導入するのではなく、まずは本人がどうしたいのか思いを確認することの大切さを学んだ。

研修項目3／7　第14回特別セミナー

【ね ら い】T-HOC受講生と総合診療医、医学生及び看護学生、地域の行政職が対話し、地域における医療従事者の専門性や医療・看護の現状、課題を理解し、相互に連携できる関係づくりを目指す
【日　　程】令和６年９月28日（土）10：00～15：00
【場　　所】倉吉市　伯耆しあわせの郷
【参 加 者】14名（欠席２名）
【アンケート回答】（一部抜粋）
・それぞれの方の経緯から訪問看護師として働き、思いや葛藤など興味深かった。
・在宅看護の魅力を感じる事が出来た。
・新卒で訪問看護師になられた方のお話がとても興味深く、新卒ではないですが参考になりました。
・どこの施設でも同様な悩みを抱えながら日々看護をされていることが分かった。
・多職種の方の思い、考えを知る事が出来た。
・色々な立場の方と意見交換ができて楽しかった。

研修項目4／7　第３回集合研修（Ⅰコース１年次合同）

【ね ら い】訪問看護ステーションへ出向した看護師から、在宅生活志向への広がりを持った退院支援について学ぶ
【日　　程】令和６年10月16日（水）13：00～15：00
【場　　所】鳥取大学医学部　記念講堂
【参 加 者】15名（欠席１名）
【研修内容】１．講義「訪問看護ステーションの出向から見えた病院看護師の退院支援」（オンデマンド）
　　講師：訪問看護ステーションネットケア　池田章幸
　　２．グループ討議「事例を通して退院支援に向けて自分はどう動けばいいか考えよう」
〈講義内容〉（Ⅰコース１年次第２回集合研修　P14参照）
〈グループ討議〉
　事例から、入院中の支援、退院後予想される状態や必要な支援についてグループで検討。
【アンケート回答】（一部抜粋）
・病院での看護と在宅での看護の違いが明確で興味深かった。
・講師のリアルな経験を聞く事が出来よかった。
・様々な意見を聴く事で退院支援について色々な角度で考えることができた。

研修項目5／7　退院後家庭訪問実習

【ね ら い】・入院中に退院支援を行った患者に対して退院後訪問を行い、実際の在宅療養生活を理解するとともに、自己の看護実践を振り返る
・今後の施設内での看護に必要なことは何かを明確にし、より専門的に個別性をふまえて退院に向けての支援を計画できる能力を養う

【実施期間】令和６年７月～11月

【実施内容】

・退院支援を行った事例の中から、在宅療養者の了承を得て家庭訪問を行うなどして、実践した看護を振り返り、レポートを作成した。

研修項目6／7　訪問看護ステーション実習

【ね ら い】・家族を含めた利用者に対し専門的知識と個別性をふまえた支援の展開を知る
・訪問看護師として多職種と協働する必要性や役割を理解できる

【実施期間】令和６年７月～11月（３～５日間）

【実施内容】

・受講生は３～５日間、訪問看護ステーションで実習を行った。
・実習最終日には、実習生と実習先のステーション管理者またはスタッフ、支援室室長または室員とカンファレンスを行い、実習の振り返りを行った。
・実習レポートを作成。

研修項目7／7　実習後の意見交換会

【ね ら い】実習で受講生が学んだことを、他の実習先で学んだ受講生と情報交換をし、学びを深める

【日　　程】令和６年12月19日（木）13：30～15：30

【場　　所】鳥取大学医学部附属病院第２中央診療棟会議室３・４（中部からは天候不良のためオンライン参加）

【参 加 者】15名

【研修内容】1. 講演「訪問看護師として大切にしていること」
アドバイザー：すまいる訪問看護リハビリステーション　　坪倉真由
2. 実習報告
3. 意見交換

【アンケート回答】（一部抜粋）

・在宅生活をされる患者さんを看る視点や、その人らしさを大切に一人一人とゆっくり丁寧に関わっていくことを改めて学ぶ機会になった。
・多くの視点を知ることができた。私自身も病棟で他の受講生の学びも伝えていけたら良いなと思った。
・病院では見落としがちの生活者としての側面を意識して関わり、その人らしさ、好きなことがその人の生きる力になっており、その力を削がないような関わりをしていきたい。
・同じ境遇にいる中で、思いが共感できることが多く、他のグループの発表もとても勉強になった。
・残念ながらオンラインの参加でしたが、同じ院内で働く者同士、リラックスした雰囲気のなか本音で語り合う事が出来てとてもよかった。

Ⅲコース：訪問看護能力強化コース

研修項目1／4　在宅医療・看護についての講義および演習

【ね ら い】訪問看護師に必要な知識・技術の向上をはかる

【内　　容】受講生が獲得したい分野に関連する科目を中心に30講義以上を受講
（訪問看護に関する学会・研修会・病院内研修・カンファレンス等への参加についても、30講義に含めることができる）

Ⅲ訪問看護能力強化コース　受講状況及び受講生の感想

1．地域包括ケアシステム

講座ID	日　時	講　義　名	講　師	受講者数	印象に残ったこと、感想（※一部抜粋）
0101	7月25日(木) 9:00 ～10:30	地域包括ケアシステムの概念・機能	米子市ふれあいの里 地域包括支援センター 地域支援課 課長　船木　敏江	5	・高齢者のみでなく、ヤングケアラーも地域包括が関わるようになり、幅広い事業所になっていることを知りました。在宅で長く安心して住み続けるために、トータルコーディネイトをしていく為の取り組みを色々な角度から支援していると感じました。・病棟、老健しか経験がないので、介護保険を利用するまで、または介護保険の該当手前の方の受けられる支援など学べて良かったです。
0102	7月25日(木) 10:40～12:10	訪問看護の制度とその活用	元名古屋女子大学 健康科学部看護学科 長谷川洋子	5	・訪問看護の歴史を振り返りながら学べてよかった。・訪問看護の制度をわかりやすく解説され、勉強になった。制度を知り、理解することは事業所の利益のみでなく、利用者の利益にもなると知った。・サービスの提供は、看護技術力だけではなく、利用者・家族の暮らしを支えるためにも制度を知っておくことが大切だと感じました。・医療保険、介護保険の違いや利用方法をきちんと学習し、活用していかないとと思いました。
0103	6月26日(水) 10:50～12:20	必須 訪問看護師の役割・機能・特性	鳥取県訪問看護支援センター 訪問看護認定看護師 鈴木　　妙	5	・訪問看護に求められる役割、機能を改めて勉強できた。具体例や事例が実践に役立ちます。看護師の５感を研ぎ澄ませ地域で過ごせるよう支援していきたい・医療に乗り遅れないように勉強は常に必要。・明日からの地域と病院の繋がりの中に取り入れていけると思え、活かしていきます。
0104	R７年 1月30日(木) 13:00～14:30	在宅における診療報酬	訪問看護ステーション 博愛 石橋佐智子	5	・加算に対して分からないことが多く、今日の講習を受け頭の中が整理できました。複雑なことが多いため勉強を繰り返し、算定漏れや間違いがないようにしていきたいと思います。・「お金」についてはトラブルになるため説明できるようにしていきたいと思います。講義を受けあらためて事業所の収益について意識が薄かったと反省です。一番知りたい興味ある講義で疑問点だった所も内容に組まれていたためとても勉強になりました。
0105	9月25日(水) 10:40～12:10	地域医療と多職種連携	日南病院　名誉院長 高見　　徹	2	・自施設の中でも医師と看護師、CW、行政がばらばらだと感じることが多々あり、「生活をみる」医師、行政の少なさを感じました。医療者としてその方の「生活」をみられるよう努力したいと思う・地域医療を確立させるまでの事を理解できた。日南町モデルや高見先生の事は知っていたが、講義が聴け嬉しかった。先生の自信をもっていこうという言葉に近づけるよう多職種の一員として看護していきたい。
0106	R７年 2月14日(金) 13:30～16:00	在宅生活志向の実践に向けて (実践コース・Ⅲコース合同)	ウィル訪問看護 ステーション 岩本　大樹	5	・“卒業” と “習慣を取り戻す”!! 先生の講義を聴き、訪問看護の目標ができました。・チャレンジ精神や利用者さんと真摯に向き合っている姿勢や貴重な経験を学べた。・「管理」でなく「支援」が成果に繋がっていく、自分もしていたかも…と改めて考えを変えていく必要性を感じた。

2．在宅医療病態論

0201	8月6日(火) 9:00～10:30	訪問看護の現場でのギモンとホンネ ～病気の病態や治療、医師との連携、知識の学び方などのギモンにお答えします！～	大山診療所 鳥取大学医学部 地域医療学講座 講師　井上　和興	4	・職場、職種を越えて、お互いを知り合うためのコミュニケーションをとる事もとても大切で有意義な事なのだなと思いました。先日の講義の自己理解と他者理解に通ずるものがあるように思いました。・皆で話をすることで、他病院や施設でも同じ悩みを抱えていて、多職種での情報交換や意見交換をする場があればよいなと感じました。先生が最後にDrのためではなく患者様のためにDrに意見をもっと言って欲しい言って頂き考え方を変えなければいけないなと思いました。
0202	9月25日(水) 13:00～14:30	在宅医療における整形外科的疾患 （骨粗鬆症など）	鳥取大学医学部附属病院 リハビリテーション部 准教授　尾崎　まり	5	・具体的で分かりやすかった、画像の診かたも学べ良かった・在宅療養の方に治療の継続の必要性と生活環境を整える事の重要性をあらためて感じた。・認知症の方の訴えは曖昧で骨折を見逃す恐れがある。看護師が知識としてもっておくことは早期発見、早期治療に繋がると思った・施設、在宅でも転倒・骨折は課題なので、転倒予防、転倒後の観察に今日の講義を活かしたい。
0203	10月9日(水) 10:10～11:50	小児の在宅医療について （博愛こども発達・在宅支援センター見学）	博愛こども発達・ 在宅支援センター 小児救急認定看護師 瀬川　千春	4	・児を取り巻く連携機関や、児のライフステージに沿った関りの必要性を学んだ・小児看護の経験が少なく、医療的ケア児とそれを取り巻く環境、サービスの実情を学べ、実際にその一端を見学もでき、受講前よりイメージしやすくなった。・自ステーションにも利用されている方がおられ、見学出来て良かった。家族の思いを一度汲み取り、一緒に相談や話をする中で信頼してもらえる存在になると理解した。
0204	11月5日(火) 9:00～10:30	在宅看護に役立つ認知症の情報 ～認知症をきたす疾患への正しい理解～	鳥取大学医学部 認知症予防学講座 教授　浦上　克哉	2	・認知症とひとまとめにせず、型によって症状も違い対応も違ってくるため、スタッフにも伝達し、その方にあった対応や、家族にアドバイスができたらいいと思います。早期発見、予防するため疾患を見極め主治医やケアマネとも早くから連携をとり進行させないようにすることも大切だと思いました・レビー小体型の方の抗精神薬投与は症状を悪化する可能性もあり注意が必要であるなど看護師も知っておくべきことだと思った。・正しい知識と正しいケアを行うことを実践したいと思います。
0205	10月29日(火) 10:40～12:10	情報通信技術を用いた在宅呼吸管理　～遠隔モニタリングが開く新しい医療～ (web配信)	元鳥取大学医学部 保健学科　病態検査学 教授　鰤岡　直人	4	・データに基づき指導や訪問看護と連携できるシステムで在宅療養でのQOLが保たれると思います・COPDで在宅酸素療法を適切に使用すると生命予後を改善すること、OSASの方にCPAPの必要性について根拠をもって説明することができる。酸素飽和度と脈拍数の散布図など、根拠が明確で説明しやすい資料として活用できると思う。医療機関の加算のため訪問看護には直接関係ないように思えたが、HOTやCPAPを使用している利用者さんに考えてみるのもいいと思った。
0206	6月26日(水) 13:00～14:30	神経系疾患 「訪問看護に必要な痙攣の診かた ～てんかん発作を中心に～」	元鳥取大学医学部保健学科 地域・精神看護学 教授　吉岡　伸一	3	・動画が特に分かりやすくてためになりました。・あまりてんかん発作をみる機会がないく動画で見ることができて良かった。様々な種類、そもそもてんかん発作かどうかの判断がつくようになり、冷静に対応できればと思います。・てんかんについて最新情報を教えてもらい、対応についても学べて良かった。

3．在宅における医療処置管理

0301	12月13日(金) 13:00～14:30 14:40～16:10 ＊連続受講	ポータブルエコーによる全身管理 （講義・演習）	鳥取大学医学部 保健学科　病態検査学 教授　加藤　雅彦	3	・患者様に侵襲なく様々な判断ができるので、使いこなせればとても有効だと思いました。もっと色々見られるように使ってみたいと思わせて頂ける講義でした。・難しい手技、専門的な知識が必要だと感じましたが、正しく実施出来ればやはり武器になるかなあと思います。楽しく学ぶことができて興味を持つことができました。ポータブルエコーの話以外にも、就労支援の話や病床についての話があり、患者様、ご利用者目線で問題を捉えておられ、とても勉強になりました。あとは解剖生理の勉強をしなければとも思いました。・エコーを使用して血流や臓器を実際に見る事が出来、せっかくNSができるならしていかなくてはと思えるよい授業で、ありがとうございました。一つ一つ多職種連携に繋げて時代に合わせた医療者になっていこうと思い、まずは勉強して出来ることははしていきます。
0302	R７年 1月30日(木) 9:00～10:30 10:40～12:10 ＊連続受講	在宅呼吸療法 「酸素療法とNPPV」 （講義・演習） 在宅呼吸療法	鳥取大学医学部附属病院 呼吸療法認定士 長谷川裕恵	4	・NPPVとCPAPの違いやモードについて分かりやすく区分が出来て良かった。マスクのフィッティングのポイントについても実際に看護する時に利用者の方にアドバイスや指導に活かせると感じた。実際の器械を見て、触って、質問できて学びを深めることができた。・利用者の出来ていること、頑張りを称賛し継続していただけるような支援していこうと思う。利用者が適切な呼吸管理ができるよう、データの報告も必要と感じた。
0303	10月31日(木) 14:40～16:10	在宅における栄養管理の実際	錦海リハビリテーション病院 管理栄養士 木嶋　恵美	3	・居宅管理指導で栄養士の訪問がある事を初めて知った。栄養状態を整えておくことはフレイル予防に繋がると改めて感じた。家庭のやり方を否定せず、受け入れながら行っていきたい・栄養内容については評価や相談したことが無かった為、必要時はケアマネや医師に介入依頼する必要があると考えた。経済的に厳しい方が多く、とろみ剤、栄養補助食品など専門的アドバイス、指導が受けれるため利用者も安心できると考えた。

0304	9月25日(水) 14:40〜16:10	がん性疼痛と看護	鳥取大学医学部附属病院 緩和ケア認定看護師 矢間　友美	4	・アセスメントの基礎から最新情報まで聴け良かった。在宅と病院では薬の種類も使い方も違ったりするので難しいなと思った。・痛みの特徴と治療薬、どのような痛みに対しての薬か分かるため、効果の有無を観察し医師へ効果を伝える事が必要であることや、疼痛評価でスケールを使用する際のポイントを知って尋ねると、詳しく痛みの変化を聞き取る事ができると改めて感じた。患者さんの心理状態も分かりやすい説明だった。・コツコツと痛みに向き合い患者さんの目標に寄り添っている様子が講義から伺えて、感銘を受けました。
0305	9月4日(水) 13:00〜14:30	在宅療養者のQOL向上のための口腔ケア 〜有効な口腔ケアの方法を学ぶ〜　（講義）	どい歯科クリニック 院長　土井　教子	5	・口腔内観察のポイントなどが分かりやすく実践に役立つ。口腔内のトラブルについての相談窓口を知り、他職員やケアマネにも共有したい。・最近はフレイル予防の点からも口内の観察をするように心がけているが、トラブルがあっても伝えられない方もあり、日常関わる自分たちが観察、次につなげる必要があると感じた。・意識障害のある方の歯の説明を聞けて納得した。・義歯の管理やパタカラ体操など分かりやすかった。
0306	9月4日(水) 14:40〜16:10	在宅療養者のQOL向上のための口腔ケア 〜有効な口腔ケアの方法を学ぶ〜　（演習）	鳥取大学医学部付属病院 歯科口腔外科 歯科衛生士 渡辺　靖子	5	・口腔内、舌、口唇など写真付きで説明があり、対応のしかたも分かりやすくすぐ実践できると思う。・意識障害や障害児等の方の歯列が内側に傾斜していてケアが難しいと感じていたので明日からの実践に繋げていきたい。口腔ケアの仕方、ブラシの使い分けも学べ良かった。・演習で患者の気持ち、術者の気持ちが実感できた。・初めて知る知識が多く、勉強になった。・普段使用している物品を実際に使って体感することができ、とてもよかった。口腔ケアマッサージの力加減をつかめた様な気がする。
0307	11月25日(月) 13:00〜14:30	呼吸ケア	鳥取大学医学部附属病院 集中ケア認定看護師 細田有紀子	4	・先入観で「いつもと同じ」とみてしまいがちですが予測する目を持ち観察することが改めて大切だと感じた。「何か変」と感じた時、呼吸数はあまり意識していなかった為、呼吸数もしっかりチェックしていこうと思う。実際の呼吸音の違いを聞けポジショニングも教わる事が出来分かりやすかった。・吸引器の無い在宅では体位ドレナージが大切になってくるため改めて学べて良かった。
0308	7月18日(木) 10:30〜12:00	【地域生活看護実践課程演習：公開講座】（特別講義）	米子医療センター 地域医療連携室　看護師 岡田　悦子	4	・名前を呼ばれる関係が改めて信頼関係の目安になるなと印象に残った。関係性の構築に努め気持ちを引き出す支援をしていけたらと思った。・利用者さんだけでなく、背景、家族とのコミュニケーション、社会資源、制度の理解も求められていると思い、日々勉強だなと思う。
0309	8月22日(木) 14:40〜16:10	在宅における感染対策	鳥取大学医学部附属病院 感染制御部感染予防対策 担当師長 感染症管理認定看護師 上灘　紳子	5	・在宅に合わせた講義でとても分かりやすかった・お宅により、協力が得られない場合もあるため、訪問側がしっかり感染に対する知識や手技を身につける必要があると改めて感じた。訪問側が持ち込まないように、職場教育の必要性を感じた。・アルコールで手が荒れる場合の対応についても参考になりました。
0310	11月25日(月) 14:40〜16:10	在宅でのリハビリテーション	錦海リハビリステーション病院 リハビリテーション 技術部　作業療法士 星山　　望	4	・屋内・屋外での生活ができるための個別性に合わせたリハビリを行っていること、地域の高齢者への啓蒙活動も行い、地域に根付いた活動を行っていることを知った。・本人の希望を聞き出し、適した目標設定や個別的で明瞭な訓練が実施をされている事例の紹介が多くあり、素晴らしいなと思いました。・訪問リハ、看護、CWなど専門的分野の発揮と連携を今後も行っていこうと思います。

4．在宅薬剤管理

0401	10月9日(水) 13:00〜14:30	複数疾患や加齢による機能低下を有する療養者の在宅薬剤管理（心疾患・糖尿病に使用する薬剤を中心に）	鳥取大学医学部附属病院 薬剤部　薬剤師 太田　友樹	4	・在宅では循環器系の疾患を患っている方が多く、今回の心不全に対する薬剤の講義はとても勉強になった。また、血糖降下薬についても、副作用や服薬のタイミングなど注意点をしっかり説明することが大切であると感じた・健康を維持していく為に内服の必要性や副作用の有無を観察し早期発見することも訪問看護師の役割と思う・利用者さんの中で心不全、糖尿は数が多いので薬について最新のことが学べて良かった。薬の種類の把握と薬剤師さんとの情報共有が大切であると感じた。
0402	10月9日(水) 14:40〜16:10	痛みの評価と薬の使い方 （在宅での麻薬管理/残薬管理／ PCAポンプの使い方）	鳥取大学医学部附属病院 薬剤部　薬剤師 栢木　啓介	4	・デイケアにPCAポンプの利用者があり、ポンプがある事で在宅生活が可能になってきているのだなと実感しつつある。麻薬を用いた疼痛コントロールの最新の情報を学べてとてもよかった。薬剤の種類も用法も多岐にわたってきておりしっかり学ばねば思った・在宅で麻薬の使用は、環境（利用者、介護者の薬の管理が困難など）によって薬の作用時間を考慮して選択する必要がある事を学んだ。医師との連携もスムーズになると療養者や家族もQOLの低下が少しでも防げるのではと思いました・レスキューのタイミングや過量状態の兆候と観察ポイントも勉強になった。
0403	8月22日(木) 13:00〜14:30	神経難病の治療と薬剤管理 （パーキンソン病を中心に）	鳥取大学医学部 脳神経内科学　准教授 渡辺　保裕	5	・パーキンソン病の病態、薬の確実投与の必要性について学ぶことができました。・パーキンソン症候群の患者は現場でも多くお会いするのでとても勉強になりました。パーキンソン治療薬がどんどん増えている印象で、どういう意図で多剤併用しておられるのか知る事ができ良かったです。・症状が悪化した利用者さんの服薬支援の介入で内服ができるようになりました。・パーキンソン治療薬服薬中の方は食事内容により吸収の違いがあり摂取する食事内容のチェックも重要な観察項目になる事を知りました。

5．フィジカルアセスメント

0501	9月12日(木) 9:00〜10:30 10:40〜12:10 13:00〜14:30 14:40〜16:10	呼吸・循環器機能（基礎） 呼吸・循環器機能（応用）	鳥取大学医学部附属病院 特定看護師／クリティカルケア認定看護師 中本　有史	3	・苦手な解剖生理を改めて見直す機会をいただきました。肺音・心音は聴けば聴くほどわからなくなります……がネットなどで続けて聴いて学習していきたいと思います。アセスメントも日常ケアの中で実践していきたいと思います。・学生時代を思い出すような初心に帰る講義でした。とてもたくさん頭を使ってアセスメントしました。非常に勉強になりました。シミュレーターを使い勉強になりました。講義の内容、グループワークもとても勉強になりました。心音聴取は非常に難しかったです。・呼吸、（心臓）循環器のフィジカルアセスメントについて、しっかり学べて役立てていける講義をありがとうございました。・心音の聴取、判断がとても苦手。耳があまりよくないな、聞こえにくいなと感じました。（自信がないとどんどん聞こえないです）
0502	11月20日(水) 13:00〜14:30 14:40〜16:10 ＊連続受講	脳/神経機能① 脳/神経機能②	鳥取大学医学部附属病院 脳卒中リハビリテーション看護認定看護師 中本　美先	2	・脳の構造、機能についてあらためて学ぶことができた。観察方法など細かな所まで学ぶことができた。また、I-SBARを使用した報告練習では実際にその場になった時どう動き、どのような観察、報告を行えばよいのか考えることができ、実際の現場で活かしたい。・意識障害のレベルはJCSで行っていたので、とても参考になり実践したい。また、麻痺の観察方法は在宅でも役立つので技術を習得し実践したいと思う。SBARではAの報告はしていなかったので、どうやったら早く治療に繋げられるかを考え報告行動することの大切さがわかりました。・知っている情報、忘れていた情報、初めて知った情報いろいろありましたが、知っていたことでも現在の仕事でしっかり活用できていないなと思うので復習していきます。
0503	10月31日(木) 13:00〜14:30	感覚・運動機能①	鳥取大学医学部附属病院 心臓リハビリ指導士 石賀奈津子	3	・講義を聴いて、気分の落ち込みから食欲不振となり、その後転倒を繰り返すようになった利用者さんを思い出し、栄養⇔運動は大切だと改めて感じた。栄養面の指導が必要であれば栄養士の介入も考えたいと思う・訪問時の観察ポイントやテストの仕方が実際に体験し分かりやすかった。リハビリとして一緒に利用者の方とやるリハビリ項目が分かり実践してみたいと思う。３食摂取することが栄養維持すること、たんぱく質摂取タイミングのポイントなども分かり勉強になった

6．セルフケア支援

0601	6月26日(水) 9:00〜10:30	必須講義 訪問看護実践に役立つ概念・理論	鳥取大学医学部保健学科 地域精神看護学 教授 仁科　祐子	5	・複雑をシンプルへ、ベストよりベター、合意形成。分かってはいてもなかなか実践するのが難しいので改めて認識し大切にしていきたいと思った・現在老健ですが、病棟から異動した後に感じた、場所によっての看護の違いのようなものを学問的に教えていただき確信に変わったような印象でした・今まで何気なしにケア等していたが「統合する看護」を念頭におき実践していこうと思います・訪問看護に必要な生活と医療を統合する看護を教えて頂き、自分の看護、これから学習を深めていく訪問看護に活かせる、とても前向きになれる講義で、考えを皆さんと話せたのも良かったです。

7．家族支援

0701	10月2日(水) 9:00〜10:30 10:40〜12:10	家族看護とは何か 家族の意思決定支援	元鳥取大学医学部 保健学科 南前　恵子	2	・家族の形態も、結婚して子供が出来て……が必ずしもスタンダードではなく、多様な形が増えてきている中で、意思決定支援が大切でかつ難しいものか、日々痛感しています.今この患者・家族がどの段階にあり、どこに問題があるのか学問的に捉えることで支援の仕方も変わってくるかなと思いました・病棟では家族と接する時間は短時間しかないが、講義では家族のセルフケアのアセスメントについて学んだ。今後家族内の役割を観察しながら、セルフケア能力についても把握して自分達が患者・利用者家族に何ができるか考えていきたい。・家族・患者さんも家族の一員であること、家族の形態も色々あり、配慮して多職種で関わっていく必要性を改めて学びました。

8．エンド・オブ・ライフケア

0801	10月2日(水) 13:00〜14:30 14:40〜16:10 ＊連続受講	死生観について 看取りのケア	鳥取大学医学部 保健学科 成人・老人看護学　講師 大庭　桂子	2	・疑似体験の前後で大きく認識が変わった印象はないが、とても貴重な体験ができた。今まで関わった方々の事を思い返しながら講義を受け、今までの経験がちゃんと学びとして活かせているかなと少し自信になった。・生死観、死の疑似体験を通してカードに書くときは決定するのに悩んでいる自分がいました。日々患者さんの気持ちに寄り添い、自分の家族と思って看護を続けていく気持ちをさらにアップさせてもらえた。・自己の死生観について、実際に「死の疑似体験」を通して、自分ならどのように日々を過ごすか考えることが出来た。自分がもし患者の立場だったらどのような対応をしたら良いのか考えることができた。看取りについても、家族は亡くなる直前に看ることと思っている方が多いように感じる。実際に看取りとなる時に、いつからいつまでか、家族がどういう意味で看取ると考えているのか方向性を整える必要性を学んだ。
0802	7月25日(木) 13:00〜14:30	地域・在宅での死を考える	すみれ訪問 看護ステーション 吉野　靖子	4	・実際の事例をたくさん紹介され、その時の思いや考えを具体的に教えてもらえて、とても参考になりました。・自分自身の過ごしたい場所で過ごせることが最大限の力になる」という言葉が印象に残った。それを支援できるよう努めていきたいと思う。チームで同じ方向を向いて支援していけるよう努めていきたい。・本人・家族の思いを汲み取り“良かったな”と思って最期を迎えられる支援はとても大切になると思った。

9．対人関係

0901	7月19日(金) 13:00〜14:30 14:40〜16:10 ＊連続受講	コミュニケーションと対人関係の心理学 コミュニケーションの再確認	鳥取大学医学部保健学科 地域・精神看護学講師 高間さとみ	3	・“こじつけのメカニズム”が知らない間におこっていることはとても怖いことだと感じました。・普段の会話や職場でも自分の感情を言葉にする事は苦手意識があります。感情を相手に伝えることで距離感を縮める作用があること、またそれにより次のコミュニケーションが生まれることを実践して体感しました。Iメッセージの大切さと自己を知る事ができました。・「Iメッセージ」と「アサーション」、特に前者が自分の苦手とするところであるように思えた。今日の講義は仕事でもプライベートでもしっかり活用していきたいなと思います。
0902	11月18日(月) 13:00〜14:30 14:40〜16:10 ＊連続受講	コミュニケーションスキル〜精神疾患を持つ人とのコミュニケーションの視点（事例展開）〜 在宅看護の難しい場面への対応	西伯病院地域在宅医療部 看護師長 精神科認定看護師 （退院調整領域） 高田　久美	3	・“ケアの核となるのは「対人関係」” 精神看護に留まらず看護を行う上で難しいなと思っています。率直に表現すること、踏み込むこと、関り続けることを意識して、その方の抱える困難を援助していけたらと思います。・精神科患者の訪問はステーション内では少なく経験が浅いです。利用者の事を思い浮かべながら受講しました。看護の実践をステーション内で共有し次のケアにつながる様行っていますが、受講して今の利用者の関りは出来ているな！と安心しました。先生にいわれたよう、その方の個性や特性をコミュニケーションを通して知り、共有しケアに反映していこうと思います。・以前の精神科患者の入院日数が年単位となっていたことに驚いた。現在、在院日数を減少し在宅日数を増やしていくことを目標としており、そのためにも訪問看護や行政の力が重要であると学んだ。「自分たちは患者になり替わる事は出来ないが、患者さんの立場になって考えることはできる」日々忙しい中であやふやになりそうなことではあるが、一番大切な事であり意識していかなければならないことであると思った。

研修項目2／4　訪問看護ステーション実習

【ね ら い】家族を含めた利用者に対し専門的知識と個別性を踏まえた支援の展開を知る
訪問看護師として多職種と協働する必要性や役割を理解できる

【実施期間】令和６年８月〜12月（２〜３日間）

【実施内容】・受講生が２〜３日間、訪問看護ステーションで実習。
・実習最終日には、実習生と実習先のステーション管理者またはスタッフ、T-HOC支援室室員とカンファレンスを行い、実習の振り返りを行った。

【課　　題】訪問看護実習レポート

研修項目3／4　地域包括支援センター実習

【ね ら い】地域包括ケアシステムの中で地域包括支援センターが実際に行っている地域住民への働きかけを知る
家族を含めた利用者に対し、専門的知識と個別性をふまえた支援の展開を知る

【実施期間】令和６年８月〜９月（１日間）

【実施内容】受講生が地域包括支援センターで１日実習を行い、訪問の同行、担当者会議のへの同席、地域の予防活動への参加などを行った。

研修項目4/4 **実習後の意見交換会（実践コースと合同）**

【ね ら い】所属先や経験が異なる受講生がお互いの学びを共有することで理解を深め今後の看護実践に活かすことができる
【日　　程】令和６年12月５日（木）13:30～15:30
【場　　所】鳥取大学医学部アレスコ棟261講義室
【参 加 者】４名（欠席１名）
【内　　容】
1．講演「訪問看護師として大切にしていること」
講師：すまいる訪問看護リハビリステーション　　坪倉　真由
2．実習報告
3．意見交換
【アンケート回答】（一部抜粋）
・それぞれの職場の視点からの感想、発表を聞けて良かった。
・各々の実習での体験が全く違うにもかかわらず共通点が多かったのに驚いた。
・他のステーション実習を経験し、これまで時間に追われて訪問が終わるイメージだったが、コミュニケーションを重視した関わりの深さを知る事が出来た。

■実習施設及び各コースの人数内訳

〈訪問看護ステーション〉

地域	実習施設	コース別人数		
		実践コース	Ⅱコース	Ⅲコース
中部	訪問看護リハビリステーションのじま		1	
	訪問看護リハビリステーションくらよし		2	
西部	訪問看護ステーション博愛	1	2	1
	すまいる訪問看護リハビリステーション	1	4	
	訪問看護ステーションネットケア	1		
	訪問看護ステーションなんぶ幸朋苑	1	2	1
	訪問看護ステーション米子東		1	
	ぱぷりか訪問看護ステーション		2	
	まごころ訪問看護ステーション		1	
	済生会訪問看護ステーション白鴎		2	
	南部町訪問看護ステーション		1	2
	はまなす訪問看護ステーション			1
	日野病院組合訪問看護ステーション		1	

〈地域包括支援センター〉

地域	実習施設	コース別人数	
		実践コース	Ⅲコース
西部	米子市尚徳地域包括支援センター	1	2
	米子市ふれあいの里地域包括支援センター	2	3
	境港市地域包括支援センター	1	

〈訪問診療同行〉

地域	実習施設	実践コース
西部	在宅ケアクリニック米子	2
	ひだまりクリニック	1
	日野病院	1

1-5　学習支援

■訪問看護ステーションラウンド

訪問看護ステーション実習中のフォロー体制

受講生が訪問看護ステーションで実習する最終日に支援室から副室長あるいは室員が各訪問看護ステーションに出向き受講生、訪問看護ステーションの担当者と共にカンファレンスを実施しました。カンファレンスでは実習で学んだ在宅における看護師の役割やスキルなどを共有し振り返りをすることで自己の課題を明らかにしていきました。

また、受講生が実習で直面した問題に対しては、解決への方向性が見いだせるようステーション管理者と連携し実習が最大の効果をだせるような支援体制をとりました。

カンファレンスに参加し、受講生たちが在宅での看護、社会資源の活用、地域との連携など幅広い知識を得て視野が広がっていく変化を目の当たりにすることで、改めて実習の成果は大きいと感じました。

また支援室のスタッフと訪問看護ステーション管理者や看護師と施設を超えて人材育成について検討する機会であり地域連携の促進に繋がると考えます。

■各病院の学習支援体制

各病院のT-HOC担当責任者

Ⅰコース（基礎コース・実践コース）の受講生が所属する各病院にはT-HOC担当責任者を任命し以下の業務を行い受講生の学習を支援する。

・T-HOC受講生が受けている教育内容を把握し助言及び指導を行う。
・院内、各部署管理者への情報発信を行う。
・在宅医療推進支援室との情報交換を図る。

令和６年度各施設のT-HOC担当責任者

・鳥取県立中央病院：吉田　一恵　副看護局長
・岩美病院：黒阪佐美代　看護部長
・尾﨑病院：神戸　通子　看護部長兼副院長
・鳥取県立厚生病院：竹本　智美　地域連携センター長兼看護局副局長
・米子医療センター：東　百合子　副看護部長
・博愛病院：足塚　則子　副看護部長
・山陰労災病院：川上　雅美　看護副部長
・日南病院：北垣麻規子
・日野病院：近藤　仁子　看護局長
・鳥取大学医学部附属病院：依藤　裕子　教育支援室看護師長
足立　佳子　教育担当副看護部長

■DVD学習支援

Ⅲコース受講生の学習希望者へ、貸出を行っています。
レポートを視聴後に提出していただき学習内容を確認しています。

DVD学習貸し出しリスト

地域包括ケアシステムの概念と機能	生涯教育理論（後編）
訪問看護制度	成人学習理論（前編）
地域医療―多職種連携―（前編）	成人学習理論(後編)
地域医療―多職種連携―（後編）	成人学習者の特性と教育指導計画（前編）
とっとり方式認知症予防プログラム　（運動編）	成人学習者の特性と教育指導計画（後編）
とっとり方式認知症予防プログラム　（座学編）	医療と倫理　倫理原則（Part 1）
人生会議	医療と倫理　倫理原則（Part 2）
リーダーシップ理論	医療と倫理　倫理原則（Part 3）
組織変革／変革理論	医療と倫理　インフォームドコンセント（Part 4）
リーダーシップとグループマネジメント(前半)	医療と倫理　インフォームドコンセント（Part 5）
リーダーシップとグループマネジメント（後半）	医療と倫理　安楽死と尊厳死（Part 6）
とっとり方式認知症予防プログラム　（運動編）	看護における倫理的ジレンマとその分析(前編)
とっとり方式認知症予防プログラム　（座学編）	看護における倫理的ジレンマとその分析(後編)
人生会議	在宅看護技術　　在宅看護・訪問看護の基本
リーダーシップ理論	在宅看護技術　　在宅療養生活における基本的な技術
組織変革／変革理論	在宅看護技術　　療養を支える技術／栄誉ケア・呼吸ケア
リーダーシップとグループマネジメント(前半)	在宅看護技術　　療養を支える技術／排泄ケア・皮膚ケア
リーダーシップとグループマネジメント（後半）	在宅看護技術　　在宅療養における災害対策と自己管理
生涯教育理論（前編）	ユマニチュード

DVD活用状況

受講生の希望者へ、貸出を行っています。
Ⅲコース受講生については視聴後にレポートを提出していただき学習内容を確認し単位を付与しています。

■専門書籍の貸し出し

令和６年度購入書籍

作　品　名	出版社	作　品　名	出版社
コミュニティケア（26-5）５月号	日本看護協会出版会	コミュニティケア（26-6）6月号	日本看護協会出版会
コミュニティケア（26-7）７月号	日本看護協会出版会	コミュニティケア（26-8）8月号	日本看護協会出版会
コミュニティケア（26-9）９月号	日本看護協会出版会	コミュニティケア（26-10）10月号	日本看護協会出版会
コミュニティケア（26-11）11月号	日本看護協会出版会	コミュニティケア（26-12）12月号	日本看護協会出版会
コミュニティケア（27-1）1月号	日本看護協会出版会	コミュニティケア（27-2）2月号	日本看護協会出版会
コミュニティケア（27-3）3月号	日本看護協会出版会	コミュニティケア（27-4）4月号	日本看護協会出版会
訪問看護と介護（29-3）5-6月号	医学書院	訪問看護と介護（29-4）7-8月号	医学書院
訪問看護と介護（29-5）9-10月号	医学書院	訪問看護と介護（29-6）11-12月号	医学書院
訪問看護と介護（30-1）1-2月号	医学書院	訪問看護と介護（30-2）3-4月号	医学書院

作　品　名	出版社	作　品　名	出版社
現役看護師かげさんの明日を生き抜く看護メンタル	KADOKAWA	訪問看護師による在宅療養生活支援を可視化する希望実現モデル	医学書院
外来で始める在宅療養支援	日本看護協会出版会	日経ヘルスケア記者がつくった医療・介護の制度・業界動向まる分かりガイド	日経BP
看護　増刊号　“小さな願い”をかなえる意思決定支援（2023.11臨時増刊号）	日本看護協会出版社	鳥取県道路地図　ライトマップル	昭文社
高齢者の在宅における多職種連携 RKD-02　Vol.2 多職種連携から支援を考える［DVD版］	株式会社医学映像教育センター		

2　出向プログラム

2-1　訪問看護ステーションへの出向システム（T-HOC支援による）

（概　　要）

病院に在籍しながら一定期間、訪問看護ステーションに出向し訪問看護業務を実践することにより病院にとっては看護ケアや在宅看護の視点の獲得、訪問看護ステーションにとっては多様な看護人材の育成・活用力の向上がはかれる両方にメリットのあるシステムである。

（目　　的）　①訪問看護師の人員確保
②施設間の連携を強化する
③病院勤務看護師が在宅志向を高める

（出向対象者）　①　原則　T-HOC　Ⅰコース（基礎・実践コース）を修了した者
②　①の希望者がなければ　T-HOC　Ⅱコース・Ⅲコースを修了した者
③　①②の希望者がなければ　T-HOCを受講している施設の出向を希望する看護師

（期　　間）原則１年間　　最長２年間（派遣先施設との協定により個別に対応）

（業務内容）訪問看護ステーションでの看護業務

（資格・条件）・看護師臨床経験３年以上
・クリニカルラダーレベルⅡ～Ⅲ

（実施体制）・病院（出向元）と訪問看護ステーション（出向先）は出向協定書を取り交わす。
・病院（出向元）と出向看護師、訪問看護ステーション（出向先）と出向看護師は労働契約を取り交わす。
・出向看護師の人件費相当額は４月～６月の３か月間は病院（出向元）が負担、７月～３月の９か月間は出向先が負担する。
・出向先の訪問看護ステーションは原則として３施設であり１施設１看護師とする。
・出向前～出向中～出向後のサポートはT-HOC支援室が行う。

（出向のプロセス）

①実施体制の整備
出向の目的や出向条件を明確にし組織内で実施体制を整備する。
病院・訪問看護ステーション双方の条件を調整し時期・期間・処遇等を決める
②契約書の締結
③研修・同行訪問・単独訪問の実施
④出向の評価

（T-HOC支援室による支援内容）

①病院や訪問看護ステーションに対して出向の意義と目的、効果を周知し参加促進を図る
②出向を行う病院、訪問看護ステーションを選定しマッチングを行う
③出向実施前・実施中を通じて病院と訪問看護ステーションの関係作りに努める
④出向元、出向看護師、出向先のニーズのすり合わせを行う
⑤労働条件、出向期間、賃金など出向条件の調整にあたり病院、訪問看護ステーションを支援する

（出向中のフォローアップ）

①学習サポートカンファレンス
２ヶ月に１回　訪問看護管理者、プリセプター、出向看護師、病院管理者、保健学科教員､T-HOC支援室担当者が集まり、訪問看護業務の習得・実施状況について確認し改善が必要であれば改善策を検討する。
②出向元看護管理者との面談
半期に一度（９月・２月）出向看護師は出向元に帰院し看護管理者等に報告・相談を行う。
③出向者交流会
半期に一度出向中の看護師、出向経験看護師、出向予定看護師が集まり、日頃の疑問や悩み、体験を共有することにより交流の促進をはかる。

（出向の効果）

＊出向元
・他院調整・退院支援能力向上
・フィジカルアセスメント能力とケアのスキル向上
・地域と病院、訪問看護ステーションとの連携強化

＊出向後の病院での役割
・退院支援の指導者役割を担うことにより院内全体の退院支援の底上げ
・地域との顔の見える関係作りの促進
・出向での学びを院内・部署内で共有する
・在宅療養を支えるサービスや多職種との連携・調整などについて指導・助言をする
・退院支援に関する勉強会講師、ファシリテーター役割などを担う

＊出向先
・訪問看護ステーションの人材確保の一助
・訪問看護の理解の促進、魅力の発信
・病院と訪問看護ステーションの連携強化
・訪問看護師の意識向上とスキルアップ

2-2　訪問看護ステーションへの出向実績

平成30年度より毎年、T-HOC受講を修了した病院看護師（鳥取大学医学部附属病院）３名が県内の訪問看護ステーションへ１年間出向し在宅療養支援の知識・技術を学び成果を病院の看護ケアや退院支援に還元している。

年　度	出　　向　　者	出　　向　　先
平成30年度	鳥大　25歳（看護師経験３年）基礎コース修了	訪問看護ステーション博愛（米子市）
	鳥大　27歳（看護師経験３年）基礎コース修了	訪問看護ステーションネットケア（米子市）
	鳥大　50歳（看護師経験３年）基礎コース修了	訪問看護ステーションのじま（倉吉市）
令和元年度	鳥大　29歳（看護師経験７年）Ⅱコース修了	訪問看護ステーション博愛（米子市）
	鳥大　43歳（看護師経験21年）Ⅲコース修了	訪問看護ステーションネットケア（米子市）
	鳥大　51歳（看護師経験４年）基礎コース修了	訪問看護ステーションのじま（倉吉市）
令和２年度	鳥大　38歳（看護師経験15年）Ⅱコース修了	訪問看護ステーション博愛（米子市）
	鳥大　44歳（看護師経験22年）Ⅲコース修了	訪問看護ステーションネットケア（米子市）
	鳥大　30歳（看護師経験８年）Ⅱ・Ⅲコース修了	訪問看護ステーション米子東（米子市）
令和３年度	鳥大　47歳（看護師経験25年）Ⅱ・Ⅲコース修了	訪問看護ステーション博愛（米子市）
	鳥大　45歳（看護師経験23年）Ⅱコース修了	訪問看護ステーションネットケア（米子市）
	鳥大　40歳（看護師経験18年）Ⅱコース修了	鳥取県済生会訪問看護ステーション白鴎（境港市）
令和４年度	鳥大　39歳（看護師経験17年）Ⅱ・Ⅲコース修了	訪問看護ステーション博愛（米子市）
	鳥大　39歳（看護師経験10年）Ⅱコース修了	訪問看護ステーションネットケア（米子市）
	鳥大　48歳（看護師経験26年）Ⅱ・Ⅲコース修了	訪問看護ステーションなんぶ幸朋苑（米子市）
令和５年度	鳥大　31歳（看護師経験８年）Ⅱコース修了	訪問看護ステーションネットケア（米子市）
	鳥大　40歳（看護師経験10年）Ⅱコース修了	智頭病院訪問看護ステーション（智頭町）
	鳥大　49歳（看護師経験27年）Ⅱ・Ⅲコース修了	訪問看護ステーションなんぶ幸朋苑（米子市）
令和６年度	鳥大　41歳（看護師経験11年）Ⅱコース修了	訪問看護ステーションくらよし（倉吉市）
	鳥大　43歳（看護師経験21年）Ⅱコース修了	訪問看護ステーション博愛（米子市）
	鳥大　51歳（看護師経験29年）Ⅱコース修了	訪問看護ステーションネットケア（米子市）

○令和６年度第１回出向者交流会

【日　時】令和６年８月２日（金）10時30分～11時30分
【会　場】鳥取大学医学部アレスコ棟２階　チュートリアル室10
【参加者】出向中看護師３名・出向経験看護師１名・看護管理者４名・看護師２名・保健学科教員２名・T-HOC支援室３名
【ねらい】出向が始まり３か月経ち単独での訪問が始まって戸惑いや不安、疑問などを感じやすい時期である。現在出向中である看護師と出向経験者、看護部、保健学科等が集まり、状況を共有・共感しながら、問題や課題等を参加者で話しあいアドバイスを得る機会とする。また交流会が出向者の出向を継続する活力につながり、訪問看護の楽しさを感じていただける事を期待し開催した。
【まとめ】１．各出向者、出向経験者から、現状について報告後全員で意見交換をおこなう。
２．出向者は利用者とじっくり向き合える時間が持てることに訪問看護の楽しさや充実感を感じている。

3．病院から在宅へ送り出す立場から受け入れる立場を経験し、患者さんの病態が連絡票だけであり情報が少なく把握ができない、大学病院と在宅の間には大きな壁があり医師に聞くにも繋がるのに時間がかかるなどの問題を感じている。大学を知っている出向者が訪問看護と病院双方の架け橋になれたらいいと考えている。

4．病棟と訪問看護が直接言葉で提案したり相談できる環境が必要であり現在取り組み始めている。
出向を経験して在宅で見れない患者はいない、と思い救命センターで多職種と協働で退院支援フロー図を作成、勉強会を開催し転院ではなく家に帰す取り組みをしている。などの出向経験者からの報告があった。

5．看護部として情報・病院と訪問看護の連携・退院前後訪問などキーワードに出向経験者を個の力ではなく看護部組織の力として発揮できるような仕組み作りを検討したい。との意見があった。

3　事業連携

3-1　看看連携による事業連携

平成27年度に開講した鳥取大学医学部附属病院「在宅医療推進のための看護師育成支援事業」は看看連携システムを基盤にした地域の看護職（訪問看護ステーション看護師、地域関連病院看護師）、医療介護施設、看護協会、医師会、自治体等と連携を強化し協働して地域で働く訪問看護師を育てるシステムです。

鳥取大学医学部附属病院看護部では以前より本院を退職した看護部長、副看護部長、看護師長などが再就職、あるいは出向という形で地域の医療機関と看看連携をとってきています。看護管理者が地域に出向することにより本院で培った看護管理能力の提供や看護体制改善などが主な役割でありますが、その他にスタッフ同士の人事交流、専門・認定看護師の派遣などを行っています。

さらに看護師のキャリアアップとして大学病院の研修会参加、地域の施設見学、新人看護師育成研修など幅広い人材育成の連携を図っています。

医療法改正に伴い病院の機能分化が推進され保健、医療、福祉等のあらゆる場において看護が提供できる能力が必要となってくる中、地域包括ケアのマインドに働きかけるには訪問看護体験、他施設との人事交流、訪問看護ステーションへの出向が効果的と言われています。この具体的な取り組みの基盤になるのは看看連携であり、看看連携からさらに発展した職種を超えた連携であると言えます。

平成30年度より毎年、T-HOCプログラム修了生が地域の訪問看護ステーションへの出向を行っています。

出向を開始するにあたり出向元である病院、出向先である訪問看護ステーションの理解、出向者のニーズの把握など多くの情報共有や調整が必要となります。このような中、異なる機能を持った施設の管理者同士、顔の見える関係作りができている看看連携体制のもとスムーズな調整ができ出向が実現し今年度は出向受け入れ可能な施設は県東部１施設、中部２施設、県西部６施設と年々増加し、出向者は目標を達成できる出向先を選択できるようになってきました。

更に４～５年前よりT-HOCプログラムを修了した受講生が訪問看護ステーションの起業や管理者として運営に携わっています。受講生の実習受け入れや、研修会の講師、アドバイザー役割を担うなど積極的に協力いただき、人材育成を通した看看連携に発展しています。

今後、在宅医療の推進のためさらに看看連携力を高め、地域で育てていただく人材育成プログラムへと繋げていきたいと思います。

3-2　そ の 他

■看護部教育支援室連絡会議

看護部主催の「看護部教育支援室連絡会議」に参加し新人レベル看護師育成状況の確認、教育体制の評価、修正について協議するとともに、看護部、保健学科、在宅医療推進支援室間で情報交換を行う。２か月に１回の定期開催。

構成員

鳥取大学医学部附属病院看護部長・副看護部長・看護部教育支援室看護師長・ティーチングナース
保健学科教員・在宅医療推進支援室員

	日　　時	内　　容	
第１回	５月28日　11時~12時	４月接遇他者評価結果 ３年目看護師キャッチ＆リリース研修予定 第１回ティーチングナースによるマンツーマン指導について	１年目新人看護師シミュレーション研修 医療安全研修まとめ
第２回	７月23日　11時~12時	基本的姿勢と態度他者評価結果 新採用者交流会まとめ 担当看護師役割研修まとめ	ローテーション業務について ６月基本看護技術習得結果　（資料５） ２年目看護師シミュレーション研修のお知らせ
第３回	９月23日　11時~12時	第１回マンツーマン指導報告 １年目シミュレーション研修基礎編報告	１年目シミュレーション研修応用編のお知らせ ２年目シミュレーション研修報告
第４回	12月24日　11時~12時	１年目シミュレーション研修応用編報告	
第５回	２月25日　11時~12時	１月基本看護技術習得率 １月電子カルテ習得率	後期マンツーマン指導結果
第６回	３月25日　11時~12時	2024医療安全まとめ	疲労蓄積度チェックリスト

4　広報活動

4-1　公開セミナー等の開催

○T-HOC特別セミナー

【目　的】在宅医療推進室主催、T-HOC受講生である病院看護師・訪問看護師、総合診療医、行政、教員、看護学生等が対話し、地域における医療従事者の専門性や医療・看護の現状、課題を理解し相互に連携できる関係づくりを目指す。

第14回

【日　時】令和６年９月28日（土）　10：00～15：00
【会　場】伯耆しあわせの郷（倉吉市小田458）
【内　容】・開会挨拶　事業担当責任者　　深田美香
来賓挨拶　鳥取県健康医療局医療政策課　医療人材確保室長　　前田俊和
・パネルディスカッション「わたしにもできる訪問看護師」
座長　　鳥取大学医学部保健学科　　仁科祐子
パネリスト
・訪問看護ステーション博愛　看護師　　門脇智尋
「新卒訪問看護師で働いて」
・訪問看護ステーションほんわか　看護師　　作埜吉美
「病院看護師が出向後訪問看護師となって」
・訪問看護ステーションせいわ　看護師　　中原裕子
「病院管理者を経て訪問看護師となって」
報告
・鳥取県ナースセンター　コーディネーター　　安住朋代
「復職を希望する看護師の動向（相談者数・年齢別・在宅希望）」
提言
・大山診療所/鳥取大学医学部地域医療学講座　医師　　井上和興
「医師から訪問看護師に期待すること」
・ワークショップ
「それぞれの立場から切れ目のない退院支援のギモンとホンネ
～円滑な在宅移行ができるには～」
・ワークショップ総括　スーパーバイザー　　井上和興
・閉会挨拶　事業担当責任者　　深田美香

【参加者】61名
T-HOC受講生21名、看護職23名、医師１名、MSW １名、介護支援専門員１名、コーディネーター１名、教員５名、学生４名、行政１名、事務３名

【まとめ】・県中部の倉吉市で開催したことによりこれまでになく東部・中部からの参加が多かった。
・異なる立場の訪問看護師からの報告は興味深かった、感動した、参考になった。などの感想があった。
・ワークショップでは経験や職種の異なるメンバーと話が共有でき支援や課題について学ぶことができ意義のある交流の機会となった。

第15回

【日　時】令和７年３月15日（土）　10：15～12：00
【会　場】鳥取大学医学部記念講堂
【内　容】テーマ　『地域の中で地域の人と共に歩む看護』
講演１「病棟看護師　訪問看護師を経てコミュニティーナースへ」
看護師・保健師・コニュニティーナース　　青山美千子
講演２「大山町でのコミュニティーナースのとりくみ」
コミュニティーウェルビーイング研究所　　中山早織
意見交換

【参加者】44名
T-HOC受講生14名、病院の看護師９名、クリニックの看護師３名、訪問看護師４名、看護管理者５名、教員３名、学生２名、行政１名、事務３名

【まとめ】・コミュニティーナースについて初めて知ったという参加者も多く、その活動内容を詳しく知る機会となった。
・訪問看護とは異なる視点や住民との関わり方など、これからの「地域での看護」を考えていく上での気づきや学びがあり、看護の可能性や広がりを感じる事ができた、まず自分の地域の活動に参加してみようなどの感想が多くあった。

○第５回T-HOC POCUSセミナー

【目　的】携帯型エコー（POCUS）の登場で、病棟や在宅で看護師がエコーを使ってアセスメントする活用場面が多くなることが期待されているが、まだ触れる機会の少なさや、技術への自信のなさなどから活用が十分ではないのが現状である。そこでT-HOC支援室では看護職が聴診器、血圧計などの道具のひとつとしてエコーを使い適切な評価をし、適切な治療・ケアにつなげていくことができるようセミナーを開催している。
第５回はエコーで腸内を観察して個々に応じた排便ケアの提供ができるように「便秘エコー」を実施する。

【日　時】令和７年１月25日（土）　９：00～11：00

【会　場】鳥取大学医学部記念講堂

【講　師】日野病院　看護師
鳥取大学医学部保健学科病態検査学講座 教授　杉原誉明

【内　容】・「Enjoy Echo」　ゼリーの中身をエコーで当ててみよう
・「エコーについて基本的な技術を身につけよう」便秘エコーの習得法と実習

【参加者】40名
T-HOC受講生２名、看護師10名、教員３名、医師３名（講師含む）、事務職３名、学内３名、業者２名、子供14名（中学生・小学生・保育園児）

【参加者の感想】
・エコーは医師が使うもので看護師は使ってはいけないと思っていた。
・専門知識が必要なため看護師ではできないと思っていたが実際行ってみると難しかったが何回か練習すればできると思えるようになった。
・腹部膨満、便秘を訴えた患者にエコーで検査したがアセスメントがなかなかできない。
・褥瘡の評価や腹水・胸水の評価なども学びたい。

○訪問看護ステーション出向経験者と看護管理者との交流会報告

【日　時】令和７年２月14日（金）17：30～19：00

【会　場】鳥取大学医学部　記念講堂

【参加者】44名（Zoom参加　２名）
出向中看護師３名、出向経験看護師３名、出向予定者１名、訪問看護ステーション管理者７名、病院看護管理者21名、病院長１名、鳥取県医療政策課１名、鳥取大学保健学科３名、T-HOC支援室４名

【内　容】①提言　◇訪問看護ステーションへの出向を経験して学んだこと
鳥取大学医学部附属病院看護師　　松田奈央
◇T-HOC出向者とのあゆみ―看護師を受け入れて―
訪問看護ステーションネットケア管理者　　角田直子
◇出向看護師に期待すること
鳥取大学医学部附属病院看護部長　　森田理恵
②講演　ウィル訪問看護ステーション江戸川 所長　岩本 大希
「病院・訪問看護ステーションの連携のために看護管理者が果たす役割」
③５グループに分かれ交流会
自己紹介の後、出向経験者から出向した感想や今後取り組みたいことなどを報告し訪問看護ステーション管理者や病院管理者が出向の効果や今後の課題などについて意見交換する。
④講師より助言
退院指導など完璧にしなくても病院サイドはバトンを渡すつもりで、在宅サイドはバトンを渡されたつもりで進めると在宅へ帰せる方が増えるかもしれない。

【参加者の感想】
・講師の「バトンの受け渡し」の例えがとてもしっくりきました。ポジティブな気持ちで患者さんや家族と関わって地域とも繋がっていきたいと思いました。
・様々な視点での意見が聞けていろいろな方と交流できてとても有意義な時間でした。
・出向者・受け入れ管理者・出向者側の管理者の考えや思いのつながりがわかり良かった。
・出向することで自部署に足りないこと、やってみたかったことを実行されていることは凄いなと思いました。
・出向者の経験を病院で活かせるようにしたいと感じた。また病院スタッフにも在宅看護をみて欲しいと思った。
・もっとT-HOCを受講するスタッフを増やして視野の広い看護師が増えるといいと思った。
・訪問看護師として地域から信頼されるステーションになっていきたいと思いました。

4-2　公開講義

T-HOC受講生に限定せず訪問看護に興味・関心のある看護師が学びやすい教育環境を提供する目的でT-HOCの講義の一部を公開講義とすることとした。今年度は年度途中より「地域医療と多職種連携」「在宅看護に役立つ認知症の情報」「患者を生活の場に戻すために必要な視点」以上の講義を公開し2名の看護師と６名の看護学生が受講した。今後も県全域の看護師を対象に積極的に取り組んでいきたい。

4-3　事業ホームページ

■T-HOC HPのトップページ

【ホームページによる情報発信】

１．在宅医療推進のための看護師育成支援事業のホームページ

【目　的】本事業のPRおよび情報発信

【内　容】講義内容の紹介、講演会等のお知らせなど

２．ホームページトップ画面
（URL：http://www2.hosp.med.tottori-u.ac.jp/hoc/）

HPアクセス数
令和６年度月別合計

	月合計		月合計
3月	579	9月	1083
4月	863	10月	1454
5月	1059	11月	517
6月	1274	12月	482
7月	1575	1月	631
8月	657	2月	634

合計　10,808
月平均　900

4-4　定期刊行物（ほっこりーな通信）

No.19

No.20

5　業績と室員自己啓発

5-1　研　　究

日本在宅看護学会第14回学術集会

【主　催】日本在宅看護学会

【日　時】令和６年11月16日（土）～17日（日）

【場　所】クロス・ウェーブ船橋

【テーマ】訪問看護ステーションへ出向した急性期病院看護師の出向後看護実践変化

【発表者】雑賀倫子・深田美香・森田理恵・大草智子

訪問看護ステーションへ
出向した急性期病院看護師の
出向後看護実践変化

〇雑賀倫子[1)]、深田美香[1)]、森田理恵[2)]、大草智子[2)]

1）鳥取大学医学部保健学科
2）鳥取大学医学部附属病院

日本在宅看護学会　COI開示

雑賀倫子[1)]、深田美香[1)]、森田理恵[2)]、
大草智子[2)]
1）鳥取大学医学部保健学科
2）鳥取大学医学部附属病院

演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業・組織および団体等はありません。

目的

訪問看護ステーション（以下St）へ出向した急性期病院看護師が認識している看護実践の変化、および所属部署師長が捉えた出向看護師の看護実践上の変化を明らかにする。

研究方法（１）

《対象》

2018年～2020年の間にSt へ1～2年出向したA病院看護師7名

出向前に所属していた部署の師長5名

《研究期間》

インタビュー：2021年6月

《インタビュー内容》

看護師：St出向による学び、病棟での役割や実践内容の変化

師長：St出向者の出向後の看護実践や病棟での役割の変化

研究方法（２）

《分析方法》

インタビュー内容を逐語録に起こす。

得られたデータから、St出向後の変化について語られている内容を抽出し、テキストマイニングツールKH Coder（ver.3）を用いて対応分析を行った。特徴ある語の分析は、KWICコンコーダンスを用いた。

強制抽出語：訪問看護、退院支援、看護師、看護連絡票、専従ナース、スタッフたち入院中、1人

使用しない語：思う、出る、あと、なんか、精神

《倫理的配慮》

鳥取大学医学部倫理審査委員会の承認（No.21A035)を得て行った。

結果

総抽出語（使用）　7,345(2,343)
異なり語数（使用）931（696）

表1．抽出語リスト（出現回数10回以上）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
言う	39	病棟	15	家族	11
患者	35	見る	14	知る	11
人	27	行く	14	入院	11
家	25	専従ナース	14	必要	11
今	23	退院	14	病院	11
スタッフ	22	在宅	12	分かる	11
帰る	22	実際	12	感じ	10
自分	21	出向	12	話	10
経験	15	生活	12		
情報	15	退院支援	12		

結果

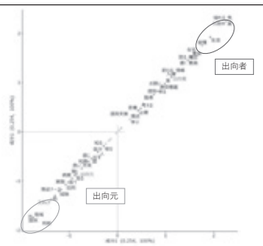


図１．原点から離れた語のみのラベル表示した図

結果

出向者の特徴ある語として、
「帰れる」、「薬」、「入院中」、「生活」、「管理」がみられた。

主に述べられていたことは、
「帰れる」どんな状態でも家に帰れる
「薬」内服状況について
「入院中」その時期にできること
「生活」退院後のこと、家でのこと
「管理」薬、病気、生活のこと

結果

師長の特徴ある語として、
「臨床」、「外」、「地域」、「判断」、「スタッフ」がみられた。

主に述べられたことは、
「臨床」現場に戻ること
「外」病棟、病院の外からみること
「地域」病院以外のサービス、そこで暮らす人
「判断」判断する力
「スタッフ」伝えたり、頼られたりする

考察

看護師は出向経験により、病棟に入院している方は家に帰ることができるのだと実感し、入院中からの意図的にかかわる時期や看護実践の視点に変化が生じたと考えられる。

師長は、病院の外から病棟をみることの経験ができたこと、判断する力などが、臨床に戻ってから発揮され、他のスタッフへの良い影響を感じていると考えられる。

5-2　研修参加

学会への参加

【学会名】日本在宅看護学会第14回学術集会

【日　時】令和６年11月16日（土）～17日（日）Web視聴

【参加者】大草智子

【内　容】会長講演「多様性と在宅看護」において在宅看護はますます幅広い領域となっている。
多様性を重んじた実践の学問領域としての在宅看護に気付く機会となる学会にしたい、と挨拶があった。中堅スタッフの人材育成についてシンポジウムでは訪問看護師の数から質を上げる時代へと移行し特に中堅訪問看護師の経験を質に変える教育が必要であること、チームマネージメント能力を習得する必要があることなどを学んだ。
また外来看護師の療養支援能力向上のために個々の学習方法に頼るのではなくスタッフが同じe−ラーニングを受講できる環境を整えみんなで学ぶ一体感を得る学習方法に効果があったと報告された。
セミナーでは訪問看護師がケアやアセスメントにPOCUSを活用している報告がありT-HOCで開催しているPOCUSセミナーのねらいについて確信を得る機会となった。
その他にも多様なテーマで興味深い講演・発表があり新たな知見を得たので今後のT-HOCプログラムに活かしたい。

研修会への参加

【研修会名】市民公開講座「やっぱり家がいい」

【主　催】中海緩和ケア研究会、鳥取大学医学部附属病院がんセンター

【日　時】令和６年８月10日（土）　13：00～15：00

【参加者】大倉広子

【内　容】① 特別講演「命を支える」野の花診療所　徳永進
徳永医師独特のユーモアを交えてこれまでのエピソードを講演された。
その中で、「寄り添う」という言葉が政治用語になってしまい、在宅医療ではむしろ「そばに居る」という方がしっくりくるのではないか、また在宅で看取るとは在宅か病院かというどちらかの選択という事ではなく最善を尽くすことであり、迷うことにも意味がるという言葉が印象的であった。
② トークセッション「在宅ホスピスという選択肢」
野の花診療所：徳永進、まつなみ医院：松波馨士、ぱぷりか訪問看護ステーション：浴田貴子、
医療法人養和会：米田桂子、アド調剤薬局：大谷誠司
連携する多職種の立場から在宅医療に関わる考え方や在宅ホスピスが広がらない理由、在宅医療を長期に継続出来ている原動力などについて話された。

在宅医療推進支援室より

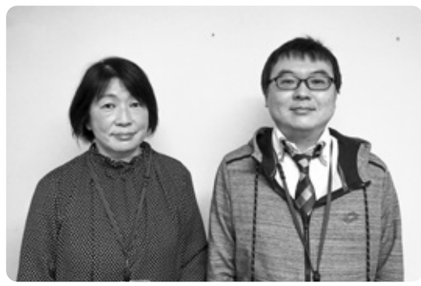
鳥取大学医学部附属病院　医療スタッフ研修センター
在宅医療推進支援室副室長　仁科　祐子

在宅医療推進支援室副室長の仁科と申します。まず初めに、今年度も、鳥取県内から多くの看護職の皆様が本事業に関心をもち受講してくださいました。受講生の皆様、また受講を後押ししてくださった病院や施設の関係者の皆様に、心より感謝を申し上げます。また、受講生の実習を快くお引き受けいただいている各事業所の皆様には、いつも暖かくご指導いただき、本当にありがとうございます。

本事業は、2024年度に10周年を迎えることができました。本年度は「より活用しやすい事業へ」をモットーに事業を実施しました。例えば、講義の一部はオンデマンドで受講できるようになりました。また、例年鳥取県西部の日野町で開催しておりました特別セミナーを、県中部の「しあわせの郷」で開催しました。例年より中東部から多くの皆様にご参加いただきました。セミナーやワークショップを通して、切れ目のない退院支援に向けて、職種や立場を越えた有意義な話し合いの機会をもつことができました。

本事業が少しずつ全県に広がっているように思います。ただ、鳥取県は全国で7番目に小さい面積ですが、鳥取―米子間が約100㎞と、移動にかかる負担は否めません。オンデマンドでの受講は知識を増やすためには有効です。対面の良さは情報交換・意見交換によって視野が広がることだと思います。それぞれの良さを活かして、全県の看護職の皆様に本事業を知ってもらい活用いただけるよう、尽力して参ります。

今年は「2025年問題」の2025年です。しかしいざ2025年になってみると、もっと大きな問題が私たちの生活を直撃しているように思います。予測は無駄だと言いたいのではありません。予測したことへの対応をしていたからこそ、それ以外の問題にも対応できるのだと思います。どのような状況であっても疾患や障がいのある人の生活が少しでもよくなるように支援するのが看護職だと思います。その方法を考える一助としてT-HOCをご活用いただけるよう、事業内容を充実させて参ります。引き続きご支援いただきますよう、よろしくお願い申しあげます。



T-HOC支援スタッフ一同

鳥取大学医学部附属病院
在宅医療推進のための看護師育成支援事業
令和６年度事業報告書（第10号）

発 行 日　令和７年３月31日
発 行 者　深田　美香
発 行 所　〒683-8504　鳥取県米子市西町36-1
鳥取大学医学部附属病院医療スタッフ研修センター
在宅医療推進支援室
TEL 0859-38-6994 ／ FAX 0859-38-6996
https://www2.hosp.med.tottori-u.ac.jp/hoc/

印刷　今井印刷株式会社